

沖縄県文化財調査報告書第3集

八重山石垣島

平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告

1976年3月

沖縄県教育委員会



卷首図版：遺跡付近航空写真（1/12,500）

共同航空株式会社提供
撮影年月日昭和47年8月

序

このたび県教育委員会では、はじめて農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査をいたしました。

沖縄県の農業基盤整備事業は、隣りの鹿児島県の達成率約50%に対して、約10%という低率であり、この種の事業の遅れは、そのまま沖縄の第一次産業の大幅な遅れを意味していると思います。したがって、昭和47年、施政権が日本へ返還されると、農林省ならびに沖縄県農林水産部は、沖縄農業の近代化をめざし、毎年数十億円を投入して沖縄県の農業基盤整備事業をおこなっています。それは沖縄県にとってまことに意義あることがあります。

しかし農業基盤整備事業は、農道、灌漑施設とともに広域の土地を改良しますので、その地域に存在する埋蔵文化財、天然記念物、民俗文化財等の土地に伴う文化財は、しばしば破壊されることがあります。今回の石垣市平得田原団体営畑地帯総合土地改良事業における平得仲本御獄遺跡もその例外ではなく、文化課の埋蔵担当専門員が同遺跡のパトロールをしたときには、すでにその半分が破壊された後でした。

われわれの祖先の残した貴重な文化遺産は、自然の風化や戦争、各種の開発などによる破壊によって年々減少しており、一度破壊された土地に伴う文化財は二度と元に戻ることはありません。現存する文化財の価値はいよいよ増大しております。現代に生を有するわれわれは、先人の残した文化遺産を次の世代へ引き継ぐ義務がありますので、県教育委員会は、残った部分の平得仲本御獄遺跡の発掘調査をすることにいたしました。

この発掘調査にあたり、文化庁から80%の補助をうけました。また発掘調査、報告書作成にあたっては、地元石垣市関係者の御協力を得ました。文化庁ならびに地元の積極的な御協力に対し、感謝の意を表します。

昭和51年3月

沖縄県教育委員会

教育長 池 村 恵 興

例　　言

1. 本報告書は、沖縄県教育委員会が国庫補助を得て、昭和50年度に実施した石垣市平得地区团体営畠地帯総合土地改良事業とともに緊急調査報告である。
2. 出土資料のうち陶磁器の同定を青山学院大学三上次男教授に、且の同定については知念高等学校教諭 知念盛俊氏にお願いした。記して感謝申し上げます。
3. 発掘および遺物整理において、次の諸氏並びに諸機関から多大な御協力をいただいた。
(敬称略 五十音順)

新本信市・栗盛哲男・石垣繁・石垣市教育委員会・石垣久雄・糸洲満・大城学・大浜長義・加屋本覚・
成下真知・崎原永光・新城啓八・新城勝・岡口広次・高瀬蒲戸・田盛毅・辻野保博・仲山忠亨・
仲山徹・中山清美・東山当徹・成底方新・比嘉朝市・比嘉朝太郎・平真小学校・仲田盛秀克・
宮良清吉・森田孫栄・八重山博物館・山田進・山田善博。

4. 本報告の執筆は次に記す通りである。なお、編集は當真によった。

I	名 嘉 正八郎
IIの1	知 念 勇 (教育庁文化課専門員)
IIの2	新 城 刚 (八重山博物館学芸員)
IIの3	大 浜 永 豊 (八重山商工高等学校教諭)
III	当 真 剛 一 (教育庁文化課専門員)
IVの1	" (" ")")
IVの2	土 器 金 武 正 紀 (教育庁文化課専門員)
" 陶磁器 安 里 剛 淳 (" ")")	
" 玉・骨器・石器・鉄器 "	
IVの2 自然遺物 知 念 勇 (" ")")	
V	当 真 剛 一 (" ")")
付	伊 波 寛 (八重山商工高等学校教諭)

5. 第1図に使用した地図は、建設省國土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1、地形図を複製したものである(承認番号 昭51. 沖縄 第16号)。

目 次

序	
例 言	
I 調査に至るまでの経緯	2
II 遺跡の位置	6
1. 遺跡の位置	6
2. 地理的環境	6
3. 歴史的環境（周辺の遺跡について）	7
III 調査の概要	12
1. 調査の概要	12
2. 層位と文化層	13
3. 発掘調査日誌	14
IV 遺跡の内容	18
1. 遺 構	18
2. 遺 物	19
土 器	19
陶磁器	28
玉・骨製品・石器・鉄製品	36
自然遺物	40
V ま と め	42
付 伝承に見る平得村の村落移動	44
図 版	

挿 図 目 次

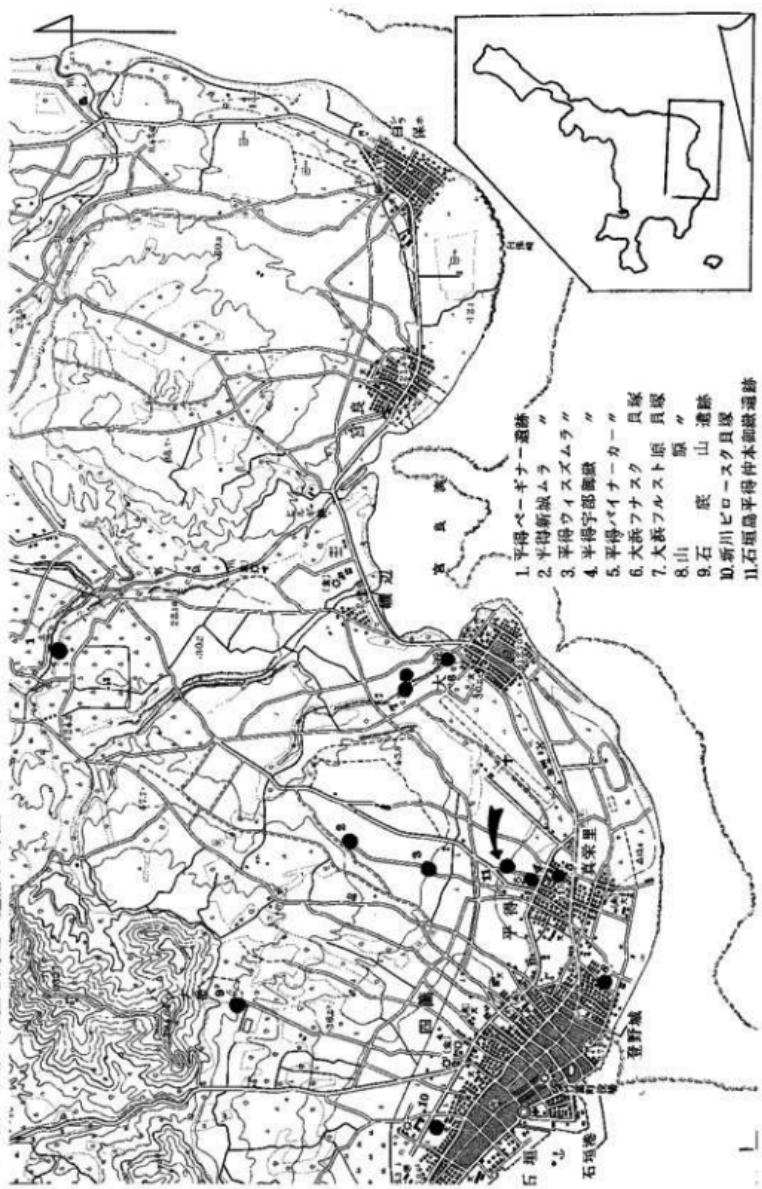
- 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図
第2図 遺跡地形図
第3図 遺跡測量図と発掘区
第4図 仲本御獄遺跡の層位 (160S8西壁)
第5図 石敷遺構
第6図 表面採集土器実測図
第7図 表面採集土器実測図
第8図 発掘で出土した土器実測図
第9図 染付
第10図 中国製青磁
第11図 青磁 (皿・鉢・盤・香炉) , 南蛮陶器 I 類
第12図 南蛮陶器 II 類
第13図 南蛮陶器 II ・ III 類, 刀子
第14図 南蛮陶器 (N 類・刻印その他), 勾玉
第15図 玉・骨製品・石斧

図 版 目 次

- 卷首図版 遺跡付近航空写真
図版 1 A 染付 角盤
B ツ 瓢高台又は外面
C ツ 瓢見込又は内面
図版 2 A 遺跡の全景 (南より)
B 遺跡の全景 (北より)
図版 3 A パイヌフツ御獄 (オン)
B 貝塚 (一部破壊)
図版 4 A パイヌフツ御獄 (オン) のイビ
B 宇部御獄 (オン)
図版 5 A パイナー井戸 (字平得在)
B トメースク (嵩田トメーの墓といわれる)
図版 6 A 発掘グリット
B 同 上
図版 7 A 石灰岩基盤が露出したグリット
B 同 上
図版 8 A 石敷遺構
B 地上構築物

- 図版 9 A 丸玉の出土状況
B 刀子の出土状況
- 図版 10 A 骨製品の出土状況
B 南蛮陶器の出土状況
- 図版 11 表面採集の土器
- 図版 12 表面採集の土器
- 図版 13 発掘で出土した土器
- 図版 14 南蛮陶器 I類A
- 図版 15 南蛮陶器 II類A
- 図版 16 南蛮陶器 II類B・III類
- 図版 17 刻印南蛮陶器・勾玉・青磁碗
- 図版 18 青磁碗
- 図版 19 青磁碗
- 図版 20 青磁(盤・香炉・フタ), 白磁
- 図版 21 染付(碗・角盤)
- 図版 22 石器
- 図版 23 A 刻印南蛮陶器, 石斧, 刀子
B 骨製品, 玉

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図



1 調査に至るまでの経緯

本報告書は、平得田原団体営畠地帯総合土地改良事業地内における平得仲本御獄遺跡の範囲確認調査の結果である。以下同発掘調査にいたる経緯について述べる。

1975年（昭和50）4月9日の新聞は、「沖縄41地区で新規着工、-50年の農業基盤整備」の見出で、「農林省は八日、かんがい排水事業など50年度の国営、都道府県営事業の採択地区、農道整備事業新規採択地区、農地海岸保全採択地区、農林漁業用渾免油税の財源身替農道整備事業新規採択地区を発表した」と報じた。この農林省の発表によると、沖縄農業の基盤整備を推進していくことを重視、新規採択地区も比較的多く、調査や実施設計を含めた新規採択地区は41地区となっている。また数字の明らかにされていない県営土地改良調査計画の11地区を除き、総事業費は約576億円であるという。

云うまでもなく、第一次産業である農業の基盤整備を実施することは、これまで遅れていた沖縄農業のレベル・アップ、すなわち沖縄農業の近代化をはかるうえで、きわめて重要な事業である。

数年前から「世界の農業生産は、世界の人口増加に追いつかない」との意見が出て、真剣に考えられるようになってきた。したがって沖縄県においても可能な限り農業の基盤を整備しなければならならない。とくに沖縄の農業は、基盤整備が遅れ、その率は鹿児島県の約50%に比較して、沖縄県は、10%余という低率である。したがって沖縄農業の基盤整備は、隣県との遅れを取り戻すためにも急速に進められるであろうと、われわれ文化財関係者は予測していた。

そこへ文化課埋蔵担当専門員が八重山石垣島の出張先より、石垣市平得地区で昭和49年度から農業基盤整備が実施されていて、すでに仲本御獄遺跡が半分破壊されていることを確認すると報告してきた。しかも平得地区の農業基盤整備は、昭和50年度も継続して実施されるという。

そこで県内土地改良に関する文化財の保護について県農林水産部と県教育委員会は、農林水産部長室で非公式に話し合いをもった。そのとき県教育委員会文化課は、①湯場整備等の計画の段階で事前に文化課へ協議して貰いたいこと、②計画前の範囲確認調査の費用は、文化庁、文化課、市町村教育委員会で負担する。その調査結果は、すみやかに農林水産部主管課へ報告する。③計画前の範囲確認調査で遺跡、貝塚、天然記念物、民俗文化財等の文化財を確認した場合は、原則として文化財地域をはずして計画を変更すべきであるが、どうしても計画を変更できないときは、その文化財の記録保存をはかること。その調査の費用は、原因者負担とする等のことを申し込んだ。そして第2回目の話し合いは、県教育委員会会議室で行うことになった。

昭和50年6月14日（土）午前9時、当委員会々議室において「県内土地改良地域に関する文化財保護についての農林水産部と県教育委員会との覚書（案）」を提示して、公式に第一回の意見調整会を開いた。この意見調整会で農水部は、「年度初めに当教育委員会側へ事業予定一覧表を提示し、文化財が含まれている土地改良事業一件ごとに協議したい」という申し入れがあり、当委員会もそれを了承した。

ちょうどこのころ平得田原土地改良地区理事長田盛毅氏から同年6月10日付文書で、石垣市教育委員会経由同地区内の文化財の有無について照会があった。この照会に対して県文化課は、沖教文第272号で平得田原団体営畠地帯総合土地改良事業地区内における文化財照会に対する意見

書を回答した。その中で同地区内の仲本御獄遺跡は、「全国遺跡地図」、「文化財実態調査報告書」『沖縄県土地利用規制現況図』に明記された周知の遺跡であり、当該地域の文化財を発掘する場合は、文化財保護法第57条2を遵守するよう指示した。この指示を受けて、同理事長田盛毅氏から6月26日付で同地区的発掘届が提出された。

同年7月7日、県教育委員会は、副本を添付して文化庁長官へ発掘届を送達した。文化庁次長からは県教育委員会教育長へ、同月22日付で事前の発掘調査について遺跡のないよう指導されたい旨通知が届いた。

昭和50年7月24日、「平得地区土地改良事業地内の文化財の取り扱いに関する了解事項」を県農林水産部長（農耕第415号）、県教育委員会教育長（沖教文第394号）両名でつぎのように了承した。

石垣市平得地区における土地改良事業地内の文化財の取り扱いについて農林水産部長と県教育委員会教育長は相互に下記のとおり了解する。

1. 平得地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵の範囲等確認については文化庁と県教育委員会がすみやかに調査して、その範囲等を農林水産部長へ報告するものとする。
2. 農林水産部長は教育長から報告された同事業地内文化財の範囲等を検討して、可能な限り文化財の保存に努めることとする。
3. 事業の性格上やむを得ず現状を変更して工事を行なわなければならない場合は当該地域内文化財包蔵地の発掘調査を完了して以後に工事を行うものとする。
なお、この場合の発掘調査費用は原因者負担とする。
4. 本了解事項に疑義を生じた場合には農林水産部長と県教育委員会教育長は、その都度協議するものとする。

以上の手続を経て、総計費2百万円（文化庁補助80%）で7月30日、平得土地改良地区における仲本御獄遺跡の範囲確認調査を開始し、8月17日、同調査を完了した。

本末、石垣市教育委員会が発掘調査の主体になるべきであったが、復帰後間もないこと、年度なればいうこともあって、県教育庁文化課が主体となる同地域の範囲等確認調査を実施した。今後石垣市内で止むを得ず発掘調査を実施する場合、石垣市教育委員会が主体となることはいうまでもない。

なお、同市文化財保護調査委員の方々、同市内文化財保護関係者は、地元の文化財は地元が主体となることを認識され、積極的に今回の範囲等確認調査に参加された。お陰で予定調査期間内にこの範囲等確認調査を完了した。

なお、発掘調査は、次のメンバーで行った。

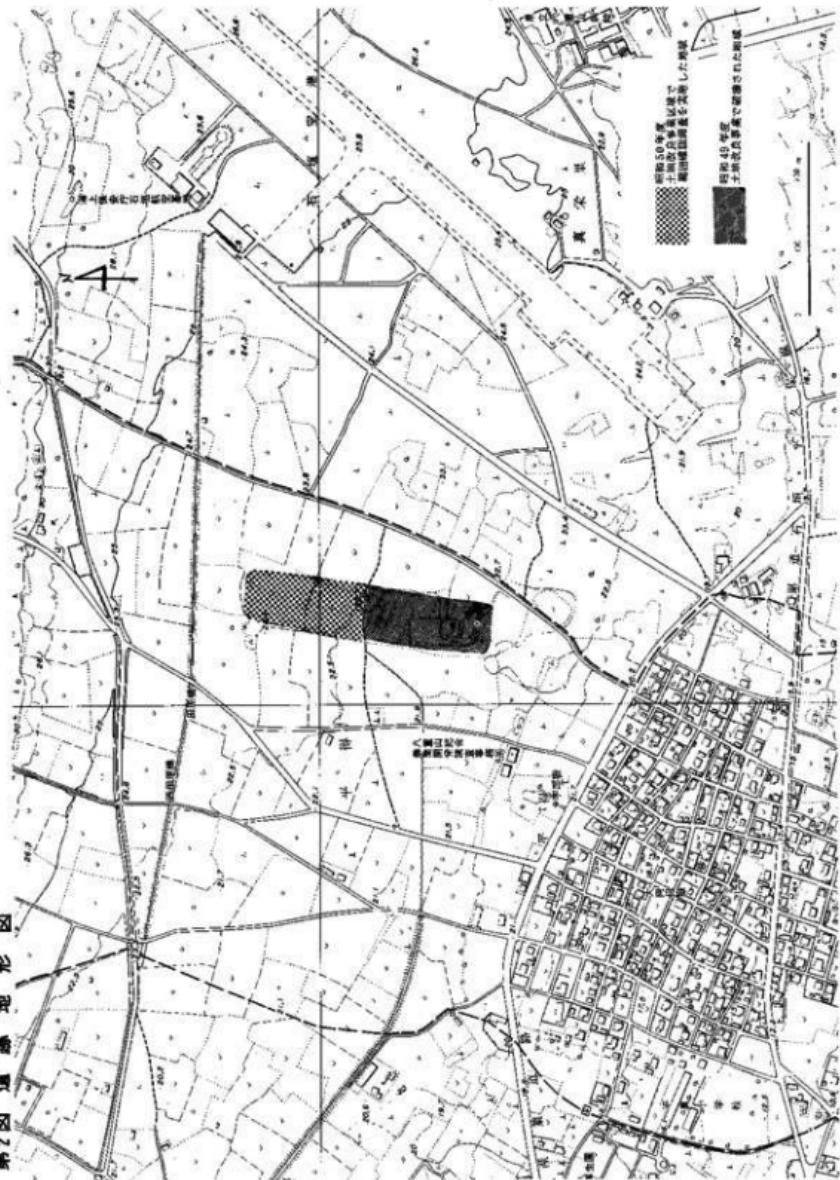
新田重清	沖縄県文化財保護審議委員	名嘉正八郎	沖縄県教育庁	文化課	主幹
安里嗣淳	"	"	"	専門員	"
金武正紀	"	"	"	"	"
知念勇	"	"	"	"	"

当 貞 謄 一	沖縄県教育庁	文化課	専門員
仲 地 洋	"	"	調査補助員(臨任)
池 城 明 子	"	"	" (臨任)
大 浜 長 義	八重山農林高等学校	教頭	
新 城 利 利	石垣市立八重山博物館	学芸員	
石 城 久 雄	八重山農林高等学校	教諭	
伊 波 寛	八重山商工高等学校	教諭	
大 浜 永 直	八重山商工高等学校	教諭	
仲 山 忠 亨	八重山高等学校	教諭	
新 本 信 市	石垣市教育委員会	事務主事	

このほか、調査にあたっては石垣市教育委員会、および土地所有者・地元の方々から多大の御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(名 嘉 正八郎)

第2図 地形地図



II 遺跡の位置

1 遺跡の位置

八重山群島は日本列島の最南端、北緯24度3分～25度25分及び東経122度56分～124度20分の範囲に散在する大小19の島々からなる。

石垣島は那覇の南方4百余キロにあり、八重山群島の最東端に位置する。島の周囲89・890km・面積223・41km²・人口36・554人で群島の中心をなす島である。島の西半部と石垣市と北部と東半部の大浜町からなっていたが、昭和39年合併（現在は一島一市となっている）。

島の北部には琉球列島中一番高い於茂登岳（標高5258m）を中心に山が発達し、平地がすくないため、集落は発達せず小集落が点在するのみである。それに比べ南半部は沖積平野が発達するため、農地にも適し、人口の大半はここに集中している。

平得仲本御嶽遺跡は石垣市街地（石垣・新川・大川・登野城の4字からなる市の中心部を八重山では4箇と呼ばれている）の東方約2kmに位置する。平得部落とは県道をへだてた北側に所在する。遺跡の範囲は約35,000m²にもおよぶ広大なもので、農耕地と原野からなる。

一帯は標高20～40m間の石垣島では最も広い平坦地であるため、戦前は日本軍による飛行場として利用された。そのため遺跡の立地する地域についても削平されその大半は破壊された。遺跡の東南にあるバイヌツフ御嶽（オン）とその中央部に残る日暦などの周辺に遺物が集中して散布が見られるのは、飛行場建設の際はこれらの地域をさけたためであろう。現在遺跡の東隣には石垣空港となっている。

（知念勇）

2 地理的環境

石垣市平得字田原にある平得仲本御嶽遺跡は、石垣市街より東の方向約2キロメートルのところに位置する。平得字田原は、平得村後方の産業道路をへだてて北側に位置し、現在国の援助によって八重山地区農業近代化のための畑かん施設、灌漑整備など23haにおよぶ大規模な土地改良事業が着々と進められている。

本遺跡は丁度その土地改良事業区の中にあって、バイヌツフオンからイリノツォンにかけて広がっている。

石垣島の地形はおおまかに於茂登岳を中心とした北部の山岳地帯と、それ以南の丘陵地帯に分けられる。

本遺跡の北側約7kmの地点、島の中央よりやや北に全琉の最高峰海拔5258mのオモト岳が屹立している。於茂登岳から東北方には野底岳（282m）、金武岳（218m）などの山々が連なり、西方には川平半島の川平大岳、川平前岳および屋良部半島のタチ岳、崎枝大岳などの山々が起伏して連なり山岳地帯をなしている。

北部の山岳地帯は大体石垣島の東北から南西にかけて境をなしており、その中央以南は標高100m～20mの波浪状のゆるやかな丘陵地帯が展開する。その地域は西は名蔵から開南、川原を経て大里、星野に広がり、南は海岸線に連する広い範囲にわたっている。この一帯は琉球列島

に広く分布する第三紀末の珊瑚石灰岩が著しく、石垣市街地から大浜、宮良付近で3～4段の段丘が認められる。また、石垣島の主要耕作地で農業生産の中核をなしており、水田は平担部から樹枝状の浸蝕谷に分布し、傾斜地はバインの栽培が行なわれ隆起珊瑚層面は甘藷畑に利用されている。

本遺跡は南側の地味豊かな沖積平野の低地にあって標高20～25mの地点に立地する。この低地の平野は西は富崎から石垣市街を経て平得、大浜、宮良、白保と石垣島の中心をなして、東西にのびている。

遺跡東側約300mのところに石垣島の表玄関、石垣空港があってその細長い滑走路が南北に1.5kmにわたって走っている。

(新 城 利)

参考文献 「八重山群島学術調査報告」

(大阪市大八重山群島学術調査隊編集)

3. 歴史的環境（周辺の遺跡について）

今回発掘調査を実施した平得仲本御獄遺跡は、石垣市字平得の後方琉球石灰岩を基盤とする台地上の一帯に形成されている。遺跡の立地する地域一帯は、石灰岩地帯のため畠地の耕土深はわりあいに浅いが常に乾燥し、麦・粟の畑作には好適の土地である。そのため八重山考古学縦年上の第三期になると、この地域一帯の開拓もすいぶんすみ、人々の定着の場もひろがっていた。これまでの分布調査の結果によると、仲本御獄遺跡を中心とした3km以内の土地に十数ヶ所の遺跡が確認されている。

これらの遺跡は、表面調査の所見によれば中国系の青磁類、南蛮手陶器、外耳土器などがおびただしく発見されるいわゆる中世の集落遺跡である。遺跡付近一帯の土地は、現在でも村びとたちの間に「旧ムラ跡」の地として伝承されていて、そこには古い井戸や御塚（オン）、拝所等が残されている。八重山の島々にあっては、伝承の地即考古学上の遺跡として知られている所が多く、興味あることである。ところで八重山島の人びとの歴史が確かな証拠として文献に残されるようになるのは17・8世紀までまたねばならず、それまでの先人たちの足跡を追うにはどうしても遺跡の考古学的調査や研究に負わなければならなくなる。このようなことからも土地に結びついたこれらの文化遺産を大切に保存し、後世に残していく必要がある。

平得仲本御獄遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物	遺跡の内容	八重山考古学上の年
1	平得ベーギナー遺跡	石垣市字平得	陶磁器、土器、石器	集落址	第三期
2	平得新城ムラ遺跡	石垣市字平得	陶磁器、土器、石器	集落址	"
3	平得ウイスズムラ遺跡	石垣市字平得	陶磁器、土器、石器、鉄滓	集落址	"
4	平得宇部御獄遺跡	石垣市字平得	陶磁器、土器、石器、鉄滓	集落址	"

5	平得バイナーカー遺跡	石垣市字平得	陶磁器、土器、鐵器	散布地	第三期
6	大浜フナスク貝塚	石垣市字大浜	陶磁器、土器、石器	貝塚	"
7	大浜フルスト原貝塚	石垣市字大浜	陶磁器、土器、石器、鐵器、玉	グスクおよび 集落址	"
8	山原貝塚	石垣市字登野城	陶磁器、土器、石器、鐵器、骨器、宋錢	貝塚、住居址	"
9	石底山遺跡	石垣市字石垣	陶磁器、土器、石器	グスクおよび 集落址	"
10	新川ピロースク貝塚	石垣市字新川	陶磁器、土器、石器、骨器	グスクおよび 集落址	"

以下歴史時代の遺跡について略述してみる。

- 1 平得ベギナー遺跡 熱帶研究所から東へと川原への農道を行くとベギナー橋がある。ここは宮良川の中流になつていて橋の手前を右へ川沿いに行くと自然の溜池、ピーラ池（ビサイ村由来名として伝承されている）がある。本遺跡はピーラ池を水源とし、この西片の標高20mの石灰岩台地上や崖下に形成されている。戦後、道路整備や採石の際に多量の陶磁器、土器が発見された。その当時、この一帯にある洞穴が宮良賀貞氏によって調査され蛤刃石斧の発見が報告されている。
- 2 平得新城村遺跡 地域御嶽の南方に新城原という標高52mの石灰岩台地がある。そこに新城井戸（降り井戸）や屋敷跡を思わずような石垣が残り、一帯には貝塚も形成されている。戦時中この地域が避難地域となって遺跡の一帯が破壊された。現在はキビ畑と牧場になっているが土器、青磁、南蛮手陶器、石斧等が発見される。
- 3 平得ウイスズムラ遺跡 平得の後方に平得村共同墓地群があり、地名をウイスズ（俗称マフタと呼ばれる）という標高30mの琉球石灰岩の傾斜台地に本貝塚は形成されている。ウイスズ井戸（降り井戸）や屋敷の跡の石垣遺構がある一帯から夥しい量の鉄くずや土器、青磁、南蛮陶器片が出土する。現在は畑と牧草地になっている。
- 4 平得字部御獄貝塚 ビサイ村の後方に同村の創成に関する字部御獄があり、そこを中心に標高10mの石灰岩風化層上に貝塚は形成されている。御獄の西方の掘り抜き井戸は新たに求めて掘ったと伝承されている新本井戸で、一帯からは夥しい量の磁器・陶器が出土する。井戸の西に戦前まで鍛冶屋跡があり鉄くずが出土する。
- 5 平得バイナーカー遺跡 平得の東端でかつての平得村馬場、南ナカムラにあり、標高は約13mである。長さ21m、34~35段の石灰岩の石段をもつ井戸である。南方井戸あるいは張り縄井戸とも云われ、ビサイ村における最初の古い共同降り井戸である。4~5年前まで節祭等に井戸さらえをし掃き清め感謝の祈願を行っていた。遺跡から夥しい量の鉄くずが出土する。現在すぐそばに住宅が建ち、うっそうと繁っていた大木が切り倒され降り口の近くまでブロック塀が積まれている。
- 6 大浜フナスク貝塚 大浜部落北東100mの大浜御嶽と潤水嶽の一带をカンドウ原といい、標高5mの砂丘上に貝塚が形成されている。現在は菜たばこ・キビ畑となっている。北側に

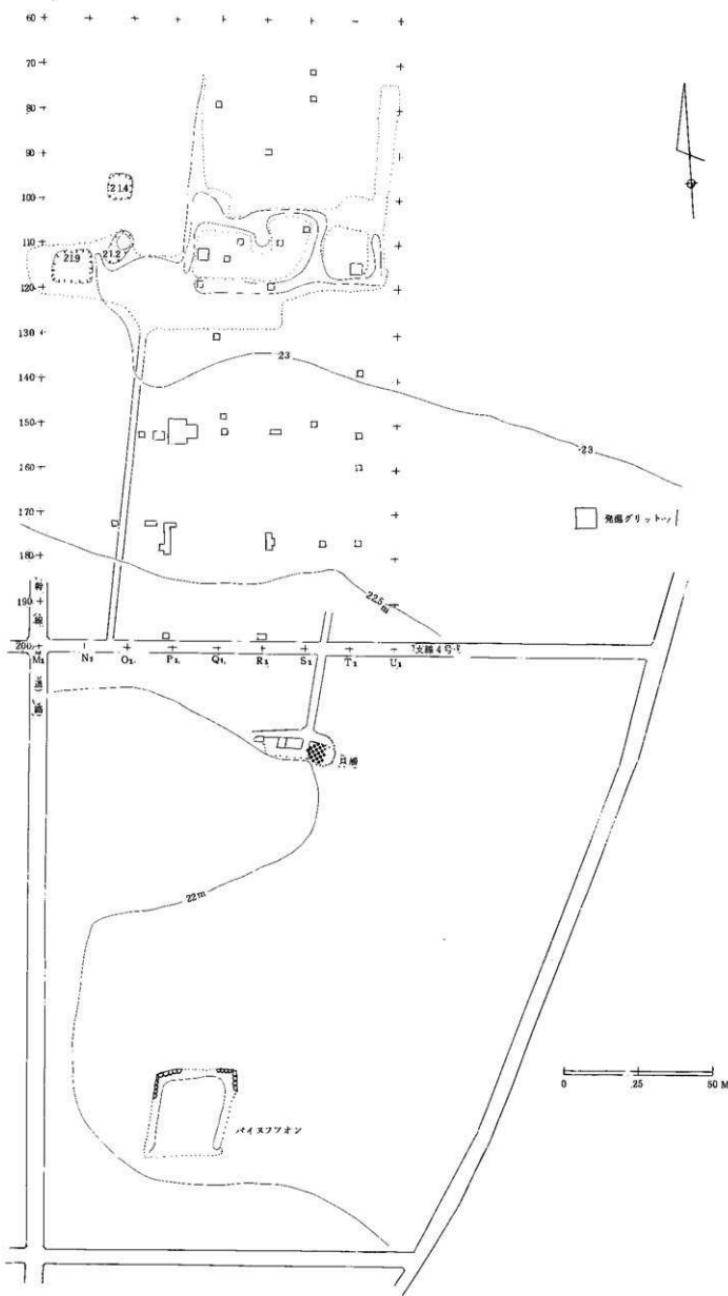
あるウーニンガー（降り井戸）があり土器・蔽石・青磁・南蛮陶器等が出土する。1976年度カンドウ原の土地改良事業によって破壊の危機に直面している。

- 7 大浜フルスト原貝塚 大浜部落の北側にオヤケ赤峰の居城と伝えられる標高23mのサンゴ石灰岩台地にスケールの大きい連郭式の城跡がある。その中腹には半洞穴が多く、そのほとんどが風葬墓や住居として使用されたと見られ、付近には墳塚が形成されている。当貝塚には東西二カ所の鐘乳洞があり土器・磁器・南蛮陶器が出土する。遺跡の眼前には宮良川が流れている。南は「舟着」（港名）があり湾内には海城がある。載前は飛行場の誘導路や避難塹に使用された。戦後の昭和37年に城の石垣が壊され現在も一部が採石によって破壊の危機に直面している。1973年6月14日の遺跡範囲確認調査の際に1.5m×3mのピットを設定し試掘を行った。この際に夥しい量の磁器・南蛮陶器・丸玉・鉄クギ等が出土し、地山まで50cmの層が確認された。
- 8 山原貝塚 石垣市字豊野城の東方南北道路に沿った標高10mの琉球石灰岩の上に形成されている。1959年に早稲田大学学術調査団によって発掘調査が行なわれた。これによると住居遺構の発見や骨角器・円形の垂飾具（オトメイモ貝）・石斧・平底の土器・陶器・青磁等とともに景祐元宝の出土が報告されている。近年貝塚の側まで住宅が建ち始め、ヒューム管工場建設の為にほとんど破壊されてしまった。
- 9 石底山遺跡 石垣市郊外の北方3kmにある標高80mのパンナ山のふもとに四箇部落の発祥の地と伝えられるいしく山という古生期石灰岩からなる森がある。そこには多くの住居として使用されたと見られる洞穴があり山全体に貝塚が形成されている。1962年の1月下旬に宮良賀貞氏を中心とする調査団によって中腹の洞穴や頂上に厚い包含層が確認され夥しい量の土器・磁器・南蛮陶器が出土したと報告されている。またその山麓にドルメン形式のハンマー主の墓があり眼下に四箇部落を見渡すことができる。
- 戦時中は避難所や要塞として使用され戦後1963年頃に採石の為に破壊され無惨な姿になっている。
- 10 新川ビロースク貝塚 石垣中学校北方の産業道路の南に標高10mの石灰岩の丘陵の森をビーロースク森といい、その南や崖下に貝塚が形成されている。丘陵台地上は山城形式のスケールの小さい単郭式の城跡で「マジャムンオオセ（幽靈が会合するの意味）」として字民に恐がられている。1959年に宮良賀貞氏を中心とする考古学研究グループによって調査され石斧・貝錘・骨針・骨斧や夥しい量の磁器・南蛮陶器・土器が発掘された。

（大浜永亘）

第3回 地質測量図と断面図

- 10 -



III 調査の概要

1 調査の概要

本遺跡は、石垣市字平得の人びとによって「旧仲本ムラ跡」の地として古くから知られている中世の集落遺跡である。昭和34年の早稻田大学八重山調査団の調査においても、外耳土器片と石器類が採集されている。同調査団の報告書には、「中本遺跡」として記されている。

昭和43年発行の『全国遺跡地図（沖縄）』には県遺跡番号297、「石垣島平得仲本御嶽遺跡」として報告されている。したがってこの報告書での遺跡の呼称については、この分布図にしたがうこととした。

発掘調査に先立ち文化課専門員が、遺跡のおおよその規模を調査するため現地へ行き、石垣市文化財調査委員の大浜永亘氏と二人で1日がかりの表面調査を行なった。その結果遺跡が東西100m、南北350m、にわたって広がっていること、そのうち東西100m、南北200mにわたる範囲はすでに昭和49年度改良事業によって破壊されてしまっていることを確認した。また、同時に昭和50年度事業分の土地には、遺物が集中して散布していることも確認した。

この予備調査に基づき今回発掘調査の対象となる地域は、昭和50年度事業地域の中でも主に平得田原480～500番地にまたがる畑地であることがわかった。

発掘調査は、1975年（昭和50年）7月30日から8月17日までの19日間実施した。

発掘グリットは、土地改良事業完了後の幹線道路と支線4号道路にはさまれた北側の土地で、遺物の散布が濃い地域が中心となるようにいた。グリット方向は幹線道路に平行になるように做北より東へ5°振って軸線を決定した（第3図）。基点を200M₁とし、東西方向へM₁～M₁₀、N₁～N₁₀、O₁～O₁₀……、南北方向へ200, 199, 198, 197……として、1.5m四方（2.25m²）のグリットとして設定した。各グリットは東南隅の交点の名称で呼んだ。そのうち70グリットを発掘した。発掘調査は、遺跡の範囲確認のための調査が主目的であったために発掘グリットも表面観察の結果比較的遺物の散布が密のところを選んでいたことにした。

当遺跡地はすでに表土層は、過去の飛行場整地で失なわれ、また現在では、スキを使用した耕作で大部分が搅乱されており、ところどころわずかに未搅乱の黒色土層が残っている程度であった。したがってほとんどのグリットが地表下約20～30cmで基盤石灰岩に達した。

120P₁から120T₁のグリット内にある構築物は（図版8-B），最近の屋敷跡のような施設であるが、地元の方々に聞いてもはっきりしなかったため、一応発掘区を8ヶ所にいて調べてみた。その結果は、遺物包含層や建物遺構等のようなものは確認できなかった。この構築物から北側地域においては、遺物の散布量が少なく、また発掘結果による出土遺物もなかった。抗番号160P₁, 161Q₁, 150P₁, 150Q₂内にある発掘区では表土を除去すると、表土層10～20cmでサンゴ石灰岩の小塊が散きつめられた石敷遺構が検出された。石敷遺構内は土器、陶器等の遺物の出土量が石敷遺構外に比べてはるかに多かった。したがって遺物の出土状況からするとある種の建物遺構と考えられる（この遺構については「L遺構」の項参照）。

(注1) 流口宏編『沖縄 八重山』校倉書房 昭和35年。

2 層位と文化層

本遺跡は、前述のとおり過去の飛行場整地と現在の耕作によって地層の下部にいたるまでかなりの搅乱をうけていた。ただ幸いなことに坑152P_s～154P_e付近で耕土深が浅かったため僅かに未搅乱の部分を確認しえた。そこより石敷遺構が検出されたのである。

では、発掘した主なグリットによって本遺跡の標準層をみてゆこう（第4図）。

第Ⅰ層 表土層で耕作土である。暗褐色を呈し、常に耕作されているせいかホロホロしてやわらかい。歟による耕土である。

第Ⅱ層 褐色を呈し粘着性がある。層は全体的に薄く約0～10cm前後である。スキによる耕土であろう。基本的に擾乱層である。

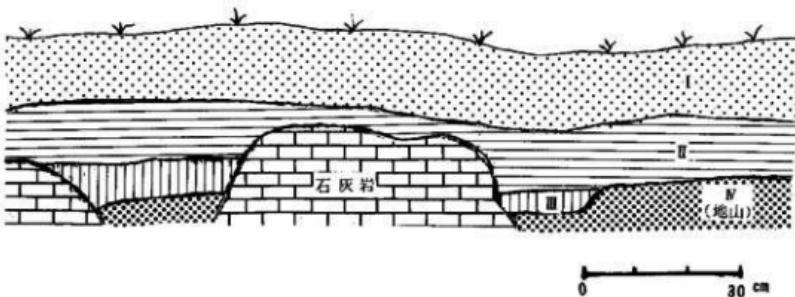
第Ⅲ層 黒褐色土層で未搅乱層であるが、非常に薄く約5cm前後の厚さをもつ文化層である。

第Ⅳ層 黄褐色土で地山である。基本的に無遺物層である。第Ⅳ層の下は基盤石灰岩と続く。いずれの発掘区においても、層位は単純で薄く表土からおよそ20～30cm前後で地山か基盤石灰岩に達した。なお、搅乱がひどい発掘区にあっては、地表下わずか数cmで石灰岩に達したところもあった（図版7）。

改良事業によってすでに破壊された南側部分には、パイヌフ御壁があり（破壊されずに残っている）、遺物はこの付近にも多く散布している。また、現在畠小屋がある小高い部分には、約6m²の範囲で貝塚が形成されている（図版3-B）。この貝塚はブルトーダーによって一部は削られてしまったが大部分が残されている。

すでに事業が完了している地域においては、地表面に遺物が散乱していたので、採集地域を地区別に分けて丹念に遺物の採集を行なった。これらの表面採集遺物は、重量にして約20kgであり、発掘えた遺物よりはるかに多かった。このことから本遺跡の中心部は、むしろ破壊された地域にあったものと考えることができる。

第4図 層位図 (160S₈ 西壁)



3. 発掘調査日誌

1975年（昭和50年）

7月30日（水）

現地に器材を搬入。地主や地元の方々、関係者への挨拶まわり。

7月31日（木）

発掘調査の方法、日程などについての打ち合わせ。

発掘地点の確認

8月1日（金）

グリットを設定し、発掘を開始。

160 T₂, 153 T₂, 146 T₂, 139 T₂ の各グリットの発掘完了。地表下10~20cmで基盤石灰岩に達した。この結果からしてT₂ラインより西側にかけての地域はかなり破壊され、遺物包含層が残っていないものと判断された。

8月2日（土）

暴風雨となり作業を中止

午後2時から八重山博物館にて今後の作業の打ち合わせ。

8月3日（日）

177 T₂, 177 S₄, 177 R₂, 154 P₆, 153 P₆, 152 P₈, 1980₁₀, 152 P₆, 154 P₄, 178 R₂ の各グリットを発掘。

8月4日（月）

地形測量を行う。

発掘が完了したところのグリットを写真撮影。

8月5日（火）

土地改良事業が終了した地域の表面探集を発掘と平行しながら行う。

198 R₁, 198 R₂, 153 P₇, 154 P₇, 176 R₂ の発掘

8月6日（水）

152 R₄, 153 Q₂, 119 Q₂, 177 R₈, 152 P₈, 152 R₈ の各グリットを発掘。

8月7日（木）

地形測量を続行。

123 Q₂, 125 R₄, 103 S₂, 152 Q₂, 153 P₈ の各グリットを発掘。

8月8日（金）

173 P₁, 173 P₂, 173 O₁₀, 173 O₇, 174 O₁₀, 175 O₁₀, 176 O₁₀, 177 O₁₀,

178 O₁₀, 179 O₁₀, 180 O₁₀, 181 O₁₀, 182 O₁₀, 173 O₅ の各グリットを発掘。

8月9日（土）

153 P₈グリットにおいて石敷遺構を確認し、この遺構のプランを追求するため拡張した
(153 Q₈, 153 O₉, 153 O₁₀, 153 P₂, 153 P₄, 152 P₄, 154 P₈, 154 P₄,
154 P₈, 155 P₄, 155 P₈)。

8月10日(日)
周辺遺跡の調査。
村の古者の案内でビサイ池周辺(仲本ムラの前進の地として伝わっている)の土地を調査。付近にペーニガ-遺跡があることを確認。

8月11日(月)
尾敷囲いに類似する構築物の調査。

8月12日(火)
153 O₄ , 120 P₆ , 120 R₂ , 107 S₁ , 72 S₂ , 82 S₂ , 178 O₉ の各グリットを発掘。

8月13日(水)
174 N₉ , 114 Q₁ , 110 R₄ , 110 Q₅ , 153 P₅ , 155 P₂ の各グリットを発掘。
今まで発掘が完了したグリットの写真撮影と断面実測。

8月14日(木)
石敷遺構の露出作業に全力をあげる。

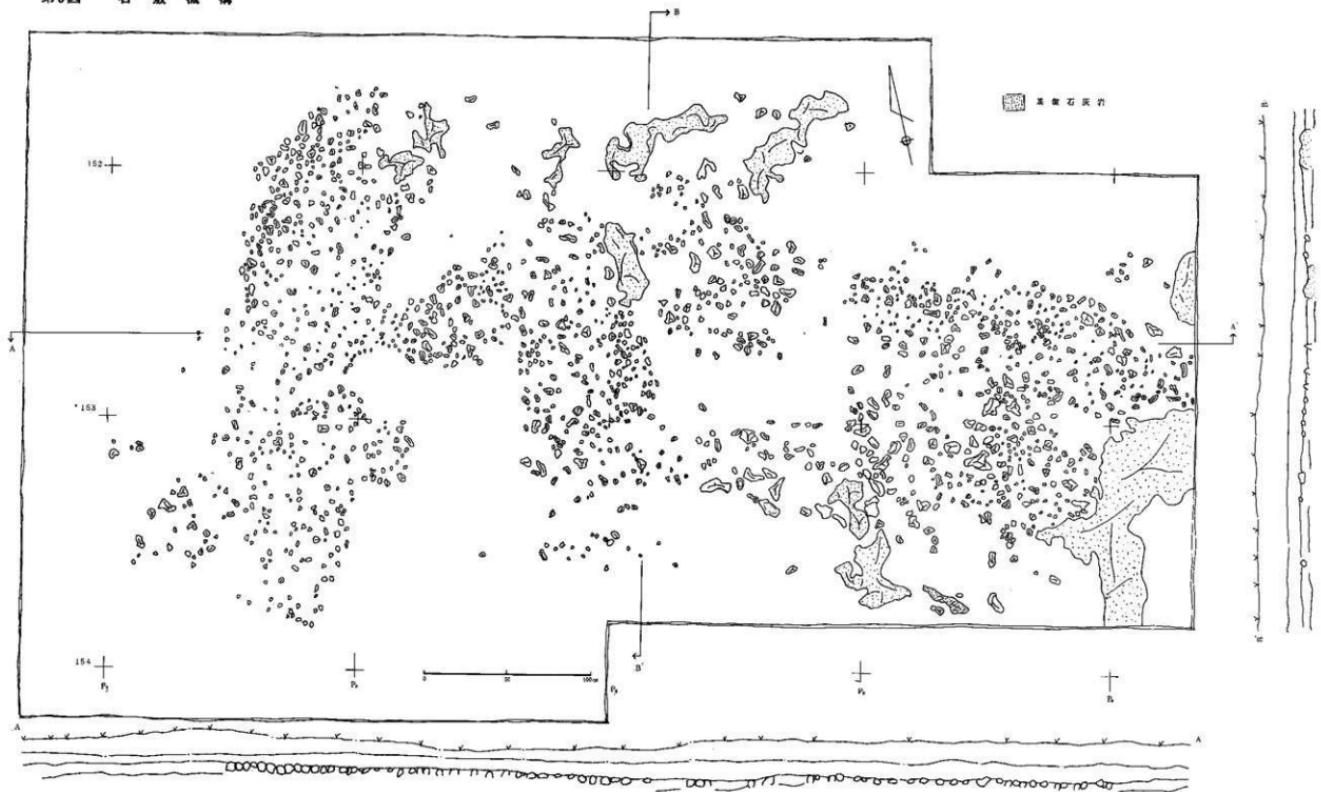
8月15日(金)
発掘を完了したグリットの断面実測、および写真撮影

8月16日(土)
埋めもどしはじめる。
石敷遺構の実測

8月17日(日)
実測、写真撮影、埋めもどしを行い調査を完了する。

(当 真 崩 一)

第5圖 石數機構



IV 遺 跡 の 内 容

1 遺 構 (第5図)

グリット153 Pa, 153 P₄ の発掘中、表土下約20~30cmのレベルで石灰岩の小塊が無数に検出された。この石灰岩小塊を追求するため周囲に大きくグリットを拡張した。

石灰岩小塊が敷きつめられたプランは、最終的に第5図のとおりとなり、石敷は152 Pa, 152 P₄, 152 Ps, 153 Pa, 153 P₄, 153 Ps, 153 Pe, 154 Ps, 154 P₄, 154 Ps, 154 Peの各グリットにまたがっていることが判明した。石敷の上面の層からは、土器、南蛮陶器、磁器、獸骨、貝殻等が出土した。石敷内と石敷外の遺物の出土状況を比べてみると、石敷内から出土する遺物がはるかに多い。石敷プラン内の石灰岩塊は、比較的密に敷きつめられた部分とそうでない部分がある。練になったところの部分については、表土層が薄いことからみて耕作の跡、石灰岩塊がとばされた可能性が強い。石灰岩塊の大きさは、直徑10~20cmをはかる塊が圧倒的に多く、ところどころ3~4cm位のコンクリート骨材用のバランス状のものも混在していた。また、これらの石灰岩塊に混じって基盤石灰岩が露出したところもある。この基盤石灰岩は、上面が平坦に加工された形跡があり石灰岩小塊群とはほぼ水平であることが観察された。石敷プラン内には、そのほか礎石として想定できるものや柱穴遺構等は全く検出されなかった。

これらの観察結果からすると、この石敷遺構がどのような機能をもっていたものであったのかについてはにわかに判断できない。ただ竹富町あたりでは、床面に石を敷いた畠小屋が最近までつくられており、このような土俗例からるとこの石敷遺構が住居址であったことも考えられる。遺物の出土量について、石敷内と外に変化があり、とくに石敷内から当時の生活資料である炭化米、炭化米のはか丸玉、ヤス状骨製品等が出土したことは、この遺構が住居址である可能性を強くしている。

石敷遺構の現在残っている大きさは、東西約6m、南北約3mである。土層は第Ⅰ層が表土層で約15~30cmを示し、第Ⅱ層は褐色を呈し5~10cmである。石灰岩小塊は第Ⅱ層下部で敷きつめられている。遺物は第Ⅱ層の下部すなわち石灰岩小塊の間や真上から集中的に出土した。なお、石敷が比較的疎らのところを選び、石灰岩小塊の下位の試掘を行なったが、出土遺物には石敷上部と下部に時期的な違いは見い出せなかった。このことから考えるとこの石敷遺構がある一時期に使用され、そのまま放棄されたものと考えることが出来る。

ところで、私たちが一番気にかけたことは、この性格の充分につかみえない石敷遺構をどういう形で保存していくかということであった。そこで事業主体者側とねばり強く話し合いをもった結果、40cm以上の盛土をして保存することで了解がついた。

(当 真 利 一)

2. 遺物

A 人工遺物

イ 土器

発掘によって検出された土器及び表面採集で得た土器は第1表のとおりである。すべて破片で、復元できるのはなく、したがって器形全体を知ることはできない。ただ口縁部や底部破片からいくらかは推定可能であり、口縁部や底部から推定して平底の鉢形土器は浅鉢形土器と深鉢形土器に分類される。また、土器全体をテンパーによってA類土器とB類土器の二種類に大別できる。

A類土器は石英細片を混入する土器で、混入物が器面に露出して手触りががさがさしている。テンパーは石英細片のみというのではなく、貝殻細片もいくらか混入しているのが多い。器色は主に赤褐色で、僅かに暗褐色や黒色土器が見られる。焼成は良好で総体的にB類土器よりもやや薄手のようである。器面調整はB類土器に比して難である。

B類土器は貝殻細片を混入する土器で、白色の貝殻細片が土器の内外面に多く見受けられる。また、貝殻細片が脱落して多孔状を呈するが多い。器色は主に暗褐色で、褐色や黒色土器も見られる。焼成は良好で、総体的に厚手土器である。

黒色土器とは全体が黒色の土器で、A類土器では僅か20個だが、B類土器では370個で圧倒的にB類土器が多い。水撫による器面調整が施され、滑らかな面を持つのが多い。

1. 鉢形土器

(1) 浅鉢形土器

第6図6(図版11の6), 第8図4(図版13の4)

発掘で3個、表面採集で4個、計7個だがすべてB類土器である。小破片のため器形全体を窺えないが、鳩間中森貝塚(注1)や山原貝塚(注2)では、深さ約7~15cmの平底浅鉢形土器の報告があり、これらに類するものかと考えられる。

(2) 深鉢形土器

(i) 外耳の付いてないもの

A類土器—第8図1(図版13の1)

B類土器—第6図1・3~5(図版11の1・3~5), 第8図2(図版13の2)

発掘で86個、表面採集で55個、計141個検出されているが、やや外反し、肩部から口唇部へ細くなっていくのが多く、一つの特徴を成している。第6図5は口唇部から肩部までは水撫で調整が施され滑らかであるが、肩部から脇部にかけては笠削りで調整され、テンパーが引きづられて荒い擦痕が見られる。このような器面調整は鳩間貝塚で「……。鉢形土器には殆んどこのような擦痕が見受けられる」との報告がある(注3)。本遺跡では口唇部から脇部まで残っている大きな破片が少なく、第6図5のような調整土器は第6図1のはかに2個みられるのみである。

外耳の付いてない口縁は、外耳土器の外耳の付いてない部分の破片なのか、又はもともと外耳土器ではなかったのかについては不明である。

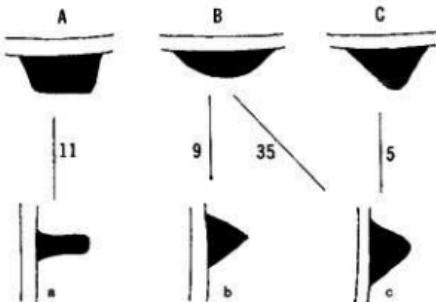
(ii) 外耳の付いているもの

A類土器—第6図2(図版11の2), 第7図4・5・7(図版12の4・5・7)
第8図7・11・12(図版13の7・11・12)

B類土器—第7図2・3・6・8(図版12の2・3・6・8) 第8図6・8~10
(図版13の6・8~10)

外耳土器は121個検出されているが、そのうち、口縁部まで残っているのは図示した14個のみである。外耳はかなり口唇部近くにあり、口唇部から1~3cm下に付いている。

第6図2は器表面に箇調整のときにテンバーが引きづられてできた深い擦痕が見られるが、器内面は滑らかに調整されている。左端に外耳が離落した痕があり、外耳の右横には煤が付着している。この外耳土器は煮沸用に使用したものと考えられる。「土器底部および外側にすすの付着しているのがまことに少なく、さらに小形の外耳土器の存在する点から、外耳土器をすべて煮沸器と断定するわけにはいかない。しかし、大形の煮沸器として使用可能なものや、前述した外耳土器の使用可能時間の問題等を考慮に入れるならば、一般的にみて、外耳土器は煮沸器としての意味を強くもつた容器と考えることが妥当であろう」(注4)との考えは支持できる。



外耳土器の形状を大雑把に分類してみると、横断面で、(A)梯形を呈するもの(第7図7),(B)半月形を呈するもの(第7図5),(C)山形を呈するもの(第7図8)に分類し、縦断面で(a)釣鐘状のもの(第7図7)(b)山形状のもの(第7図5),(c)三角形状のもの(第7図4)に分類できる。両者の組み合わせを考えてみると、Bbが35個で最も多く、Aaが11個、Bcが9個、Cbが5個で、残りの外耳は欠損が大きいため分類しかねるので除外した。ここで、Aaの11個のうち8個、Bcの9個のうち6個はA類土器であり、この二つに関してはA類土器が多く、一つの特徴を成している。

外耳の製作手法を見ると、B・Cはすべて棒状の粘土を貼り付け、指で形を整えていく手法であるが、Aの中で、第7図7のように、棒状の粘土をU字状にし、最初に両端を貼り付け、指で整えていく手法が見られる。高い梯形状の外耳には、この手法で作られたのが見られる。

2. 壺形土器

A類土器—第6図7(図版11の7), 第7図1(図版12の1)

B類土器 - 第6図8~10 (図版11の8~10) 第8図3・5 (図版13の3・5)

壺形土器は少なく全部で9個である。鉢形土器に比して薄手で焼成良好な土器である。外耳の付いているのは見当らない。A類土器は、器内面はよく調整されて滑らかであるが、器表面は凹凸があり調整がよくない。しかし、B類土器は器内外面とも水塗で調整によって滑らかに調整されている。

3. 土器底部

鉢形土器も壺形土器も今回の採集品はすべて平底である。鳩間中森貝塚からは丸底の報告(注5)があるが、山原貝塚(注6)や黒島・波照間の遺跡(注7)では丸底の報告はない。本遺跡でも丸底は確認できなかった。

平底を底部から胴部へ移行する角が(a)円味をおびるもの(第7図9・10、第8図13・14)と、(b)角ばっているもの(第7図11・12、第8図15)に大別できる。A類土器では(a)が31個、(b)が32個ではほぼ同数の出土状況であるが、B類土器では(a)が144個で(b)が22個と(a)がかなり多い。また(b)の中には第7図11のようにややくびれた土器も若干見られる。

第7図11はくびれの部分に縫目が見られ、粘土で円形の平盤を作つて、その上に粘土を輪積みしていく土器製作手法が窺える。

第7図10は拓影や図版7の10の写真で見られるように、底部に竹籠の編目と考えられる文様がついている平底である。この編目は、沖縄本島でミーゾーキー(八重山ではソーギヤー、ソギ、ソイと呼ぶ地方が多い)(注8)と呼ぶ、平たい籠の網代編みの編目に酷似している。材料は竹以外に与那国では、マーニ(クロツグ)の葉柄の外皮で作ったものがあるという報告(注9)もある。おそらく、編目の上で土器を作ったのではなかろうか。

4. 土器胴部

A類土器が発掘で631個、表面採集で343個、計974個で、B類土器が発掘で、3,359個、表面採集で1,202個、計4,561個の採集品である。A類土器に比してB類土器は厚手である。箆削りで混入物が引きづられてできた擦痕があるのがかなり見られる。

注1. 高宮 広衛 「八重山鳩間島中森貝塚発掘概報」文化財要覧

C・W・ミーアン 1959 琉球政府文化財保護委員会

注2. 玉口 時雄

金子 浩昌

大川 清

中村 恵次

山原貝塚「沖縄八重山」瀧 口 宏編

1960

注3. 注1と同じ

注4. 注2と同じ

注5. 注1と同じ

注6. 注2と同じ

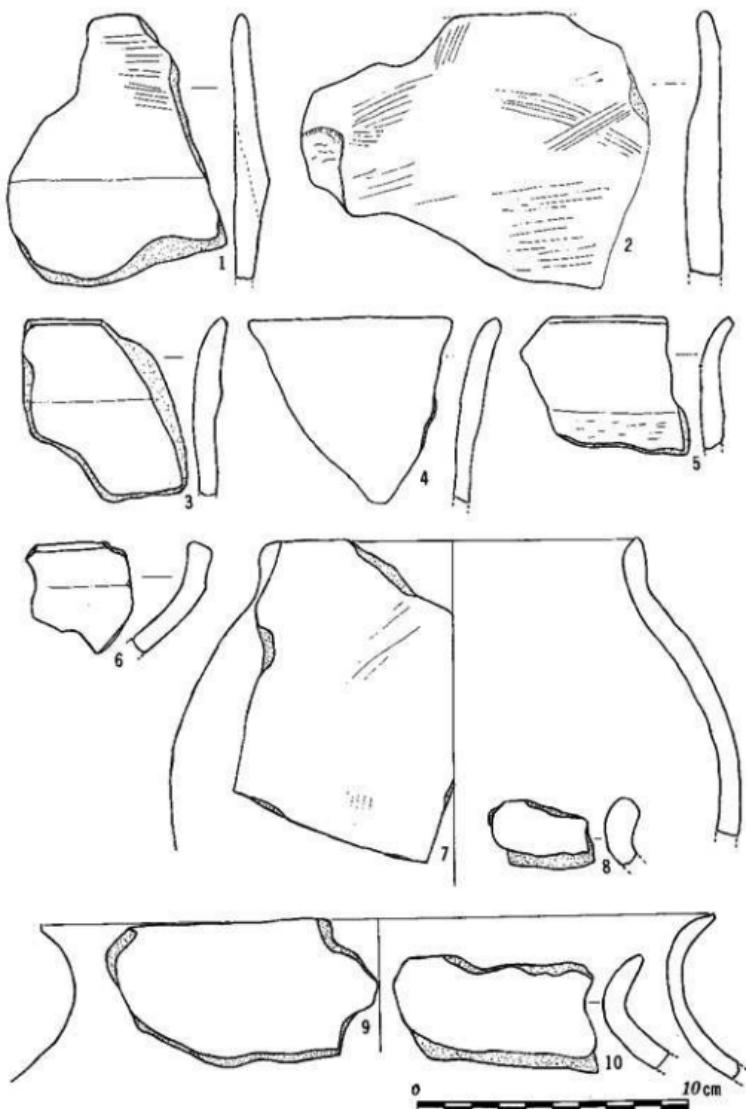
注7. 「郷土」第3号 沖縄大学学生文化協会 1966

注8. 上江洲均著 「沖縄の民具」 廉友社 1973

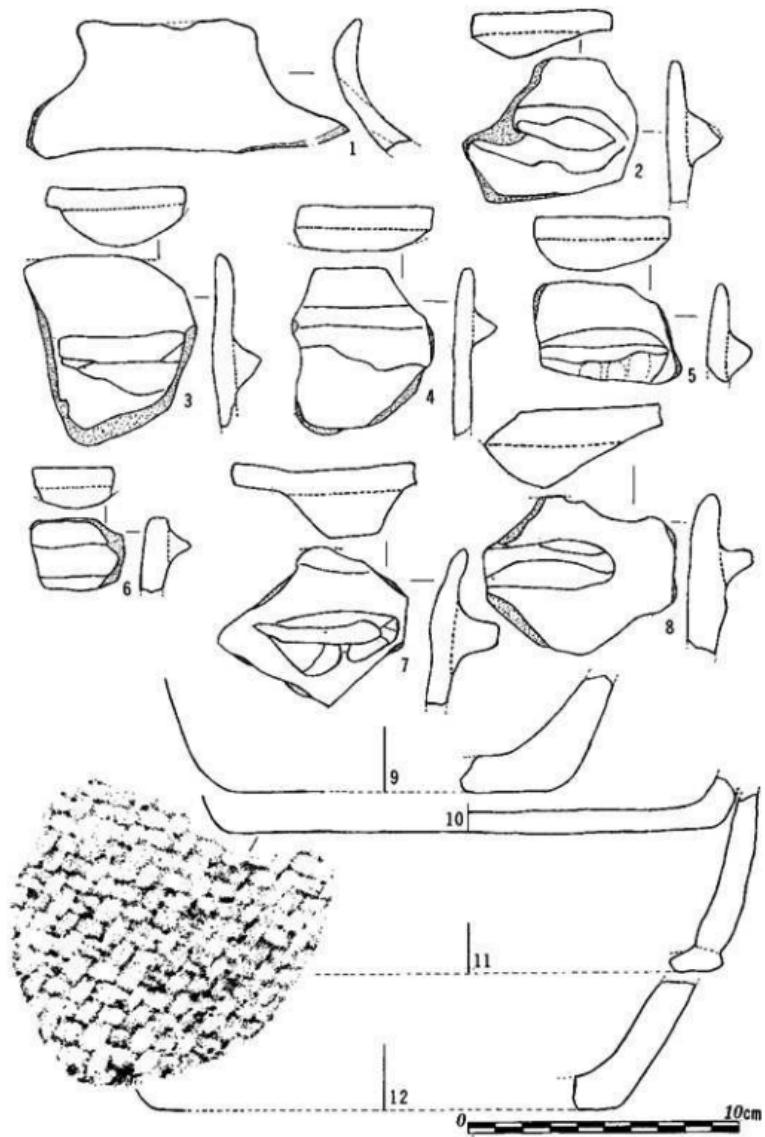
注9. 同 上

(金武 正紀)

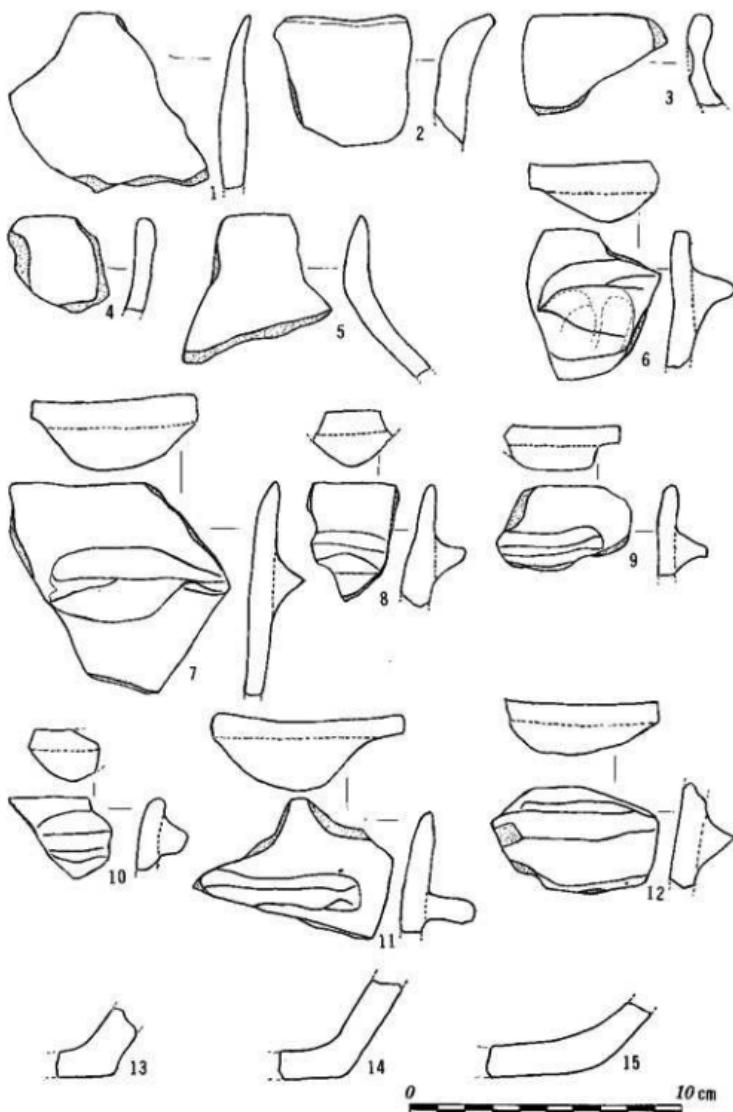
第6図 表面採集土器実測図



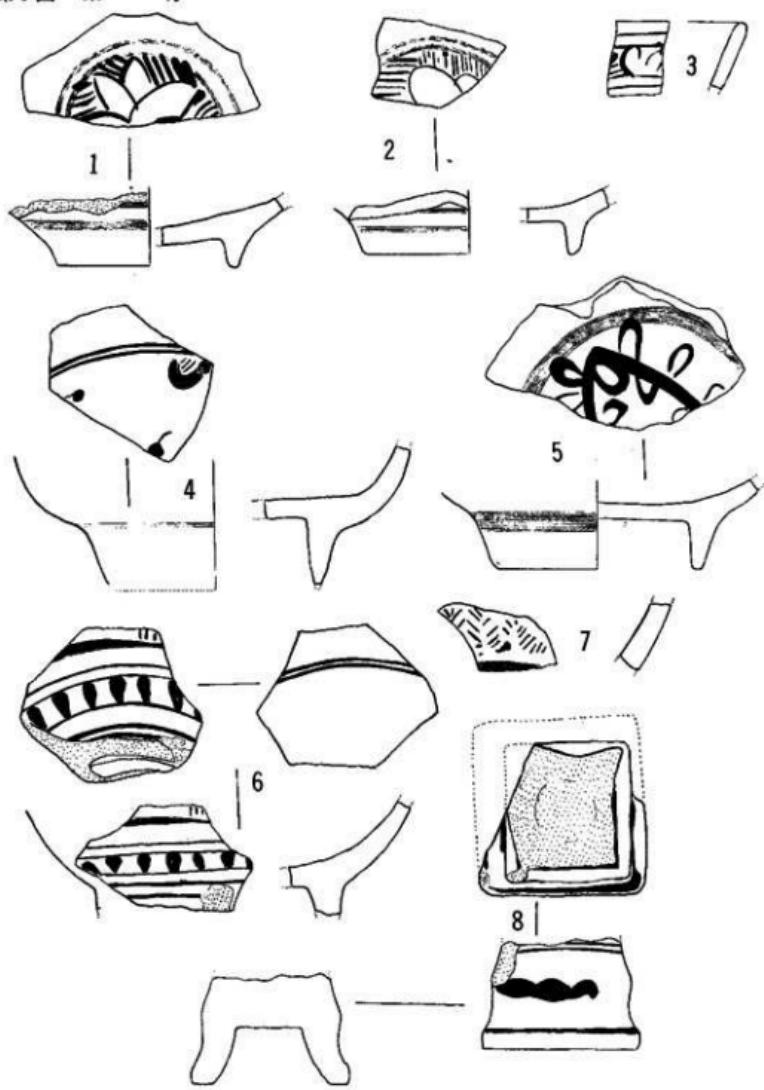
第7図 表面探集土器実測図



第8図 発掘で出土した土器実測図



第9図 染付



0 10 cm

第1表 土器集計表

グリットNo	順序	口縁部(器形)		底部(平底)		外耳	胴部	合計
		浅鉢形	深鉢形	臺形	丸形			
103S ₂	第II種			2			15	17
119Q ₂	I			2			14	19
"	II			1			24	25
"	遺構					1	14	15
123Q ₂	第I種			2	3	1	31	37
"	II				2	1	44	47
125R ₄	I				1		38	39
139T ₂	I						3	3
146T ₂	I						4	4
152P ₄	I	1		2	2	1	87	94
"	II			6	2	3	110	121
152P ₅	I			2		3	56	63
"	II			1	4	2	105	113
152P ₆	I			1	3		34	38
152Q ₂	I						16	16
152S ₄	I				1	1	21	23
153K ₄	II						14	15
153O ₈	II						18	19
153P ₂	II				2		55	57
153P ₃	I			5	5	3	167	181
153P ₃	II			5	4	9	179	198
153P ₄	I				2	1	97	100
"	II			4	1		69	74
153P ₅	II			1	1	2	41	45
"	遺構						1	36
153P ₆	I	1		2	1		179	184
153P ₇	II			8	7	4	186	205
153P ₇	遺構			1	3	3	109	116
153Q ₈	第I種				1		20	22
153S ₂	II						12	12
153T ₂	第I種						14	14
154K ₄	II				1	1	62	65
154P ₃	I			3	1		33	37
"	II			5	5	3	188	207
154P ₄	II			5	3	3	137	148
154P ₅	II			1	4	1	155	168
154P ₆	I			1		2	112	118
154P ₇	I				1	1	43	46
155P ₂	I			3	1	2	24	30
"	II			1	1	4	69	73
"	遺構			1		1	52	58

グリット No	槽序	口縁部(器形)			底部(平底)		外耳	胴部	合計
		浅鉢形	深鉢形	壺形	丸形	角形			
155P ₃	第II槽			5		6	2	4	62 79
155P ₄	II			1		1			77 79
156P ₃	I				3	1	1	33	38
"	II							10	10
158O ₉	II			2				51	54
160T ₂	I							18	18
173O ₅	I			1				25	26
"	II			1		3	1	100	105
173O ₇	I			4		4	1	2	113 124
173O ₁₀	I			1		1			22 24
173P ₁	II			1					16 17
173P ₂	I					1			12 13
174O ₁₀	II								15 15
175O ₁₀	II					1			56 57
176O ₁₀	II					3			64 67
177O ₁₀	I			2		5		1	69 77
"	II			1		7	1	3	120 132
177P ₁	I						1		50 52
177R ₁	I							1	84 85
"	II								19 19
177R ₂	I								3 4
177R ₂	II								89 89
177T ₂	I							1	4 5
"	II								3 3
177S ₄	I						1	1	60 62
178O ₉	I	1	1			2	1		56 61
"	II				1	1	1		32 36
178O ₁₀	II							1	13 14
179O ₁₀	I					1	1		0 2
"	II			1					0 2
202R ₁	I					1			2 2
203O ₁₀	I							1	11 12
"	II								10 10
発掘土器合計		3	86	3	109	36	69	3,990	4,296
バイヌツォン周辺表面採集		1	16		7	3	3	157	187
小屋の周辺	"	1	30	4	40	9	43	978	1,105
発掘地及びその北	"		6	2	16	5	5	305	339
ウブオノの周辺	"	1	2		2	1	1	63	70
平得部落内	"	1	1		1			42	45
表面採集土器合計		4	55	6	66	18	52	1,545	1,746
総合計		7	141	9	175	54	121	5,535	6,042

陶磁器

中国製青磁

表面採集および発掘によって得られ、その量は比較的多い。

(1) 器種

完形又は全形を窺えるものではなく、すべて口縁片、胴部片、底部片等の破片である。その中で高台部分については原形をとどめるのが比較的多く見られる。青磁の大部分は碗又は浅鉢に属するものである。わずかながら皿・盤・鉢・香炉等も得られている。フタと思われるものも1例ある。

(イ) 碗又は浅鉢（第10図 1～33 図版17D・図版18・図版19）

得られた中国製青磁の中で最も多い。口縁がやゝ外反するもの（91片）と、直立するもの（32片）とがある。高台の疊付に近い外縁を斜に削り取ったものと、そうでないものとがある。

(ロ) 皿（第11図1・2）

2片得られた。

(ハ) 鉢（第11図3・4）

2片得られた。1例は厚手のもの、1例は比較的薄手で、高台部は外縁ではなく、底部を削り出している。

(ニ) 盤（第11図9～12、図版20A・C）

4例得られている。2例は大浜永亘氏がかつて宇部オンで採集してあったものである。口縁が水平になり、輪花状の縁をなすものと、階段状の口縁が張り出し、縁辺が直立するものとがある。

(ホ) 香炉（第11図5～7、図版20B）

4片得られた。碗と高台の疊付はほぼ同レベルである。いずれも内壁は施釉しない。

(ヘ) フタ（第11図8、図版20Aの左下）

フタと見られるものが1片得られた。挿入部の径は8cmである。裏面は施釉しない。

(2) 色

(イ) 色

主として緑色、青緑色、緑褐色等が多い。わずかながら透明度の高い水色のものも得られている。

(ロ) 施釉

高台の疊付の部分まで施釉するもの（57片）と、疊付の部分には施釉しないものの（87片）とがある。37片の高台片は細片のため不明である。疊付に施釉されるものには、高台内部に円形の窯道具の痕跡が認められる。

見込の部分に施釉されるもの（160片）と、見込の部分が露胎のもの（20片）とがある。1片は不明。

本遺跡で得られた中国製青磁は、底部（高台内部）には施釉しないのが一般的であり、かつ特色であるが、2例のみ疊付を除く全面に施釉するものがある。

(3) 素地

灰白色を呈するものと、淡茶色を呈するものとがあり、前者には黒と白の微粒の含まれるものもある。表面がガラス状の磨削面を呈するものとそうでないものとがある。気泡が多くみられる。

(4) 文様

文様は比較的少ない。その中で碗・浅鉢は口縁の直立するものについては、口縁外面に条線、雷文、蓮弁等の文様を施すものがある。外反するものには施文されていない。

碗、浅鉢の見込みに、スタンプによるとみられる草花文を主とした文様が施されるものがある。双魚や文字を描いたものもある。

白磁

碗とみられるものが口縁片3、底部片8得られた。1例盃状のものが得られた。いずれも下脚部以下高台・底部には施釉しない。見込は施釉されている。文様はない。素地は灰白色～白色である。14世紀に属するとのことである。

青白磁

口縁片が5、底部が10得られた。文様はない。口縁片で1例唇部が露胎のものがあり、伏焼のためと思われる。高台は比較的よく整えられている。下脚部から以下にかけて施釉しないものもある。見込は1例を除きすべて施釉されている、高台から底部にかけて全面施釉されているものが1例ある。他はすべて豊付から底部にかけては施釉しない。文様はない。15Cを中心とし、1例のみ・14C末のものがあるとのことである。

灰白磁

口縁2片、高台9片得られた。素地は灰白色を主体とする。すべて碗である。口縁は直立する。高台はすべて豊付が平たいもので、しっかりしたつくりである。下脚部から底部にかけては施釉しない。見込はすべて施釉されている。5例は、見込にスタンプによるとみられる草花文様が施されている。14C末に属するとのことである。

灰青釉

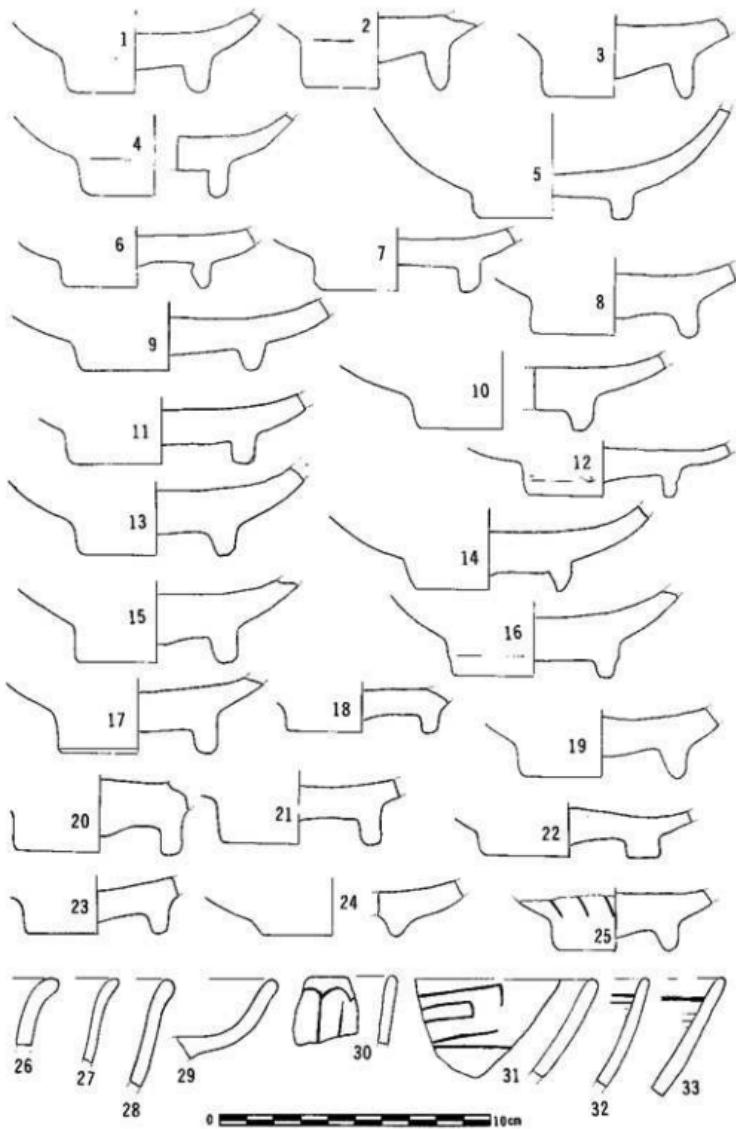
口縁5片、高台部3片得られた。碗に属する。口縁は直立か、わずかに内傾する。口縁外面に一条の回線文をめぐらすものがある。見込にスタンプによるとみられる。草花文を施すものが1例ある。素地は灰白色を主体とする。

下脚部から高台・底部にかけては施釉しない。見込は1例は露胎、2例は施釉されている。

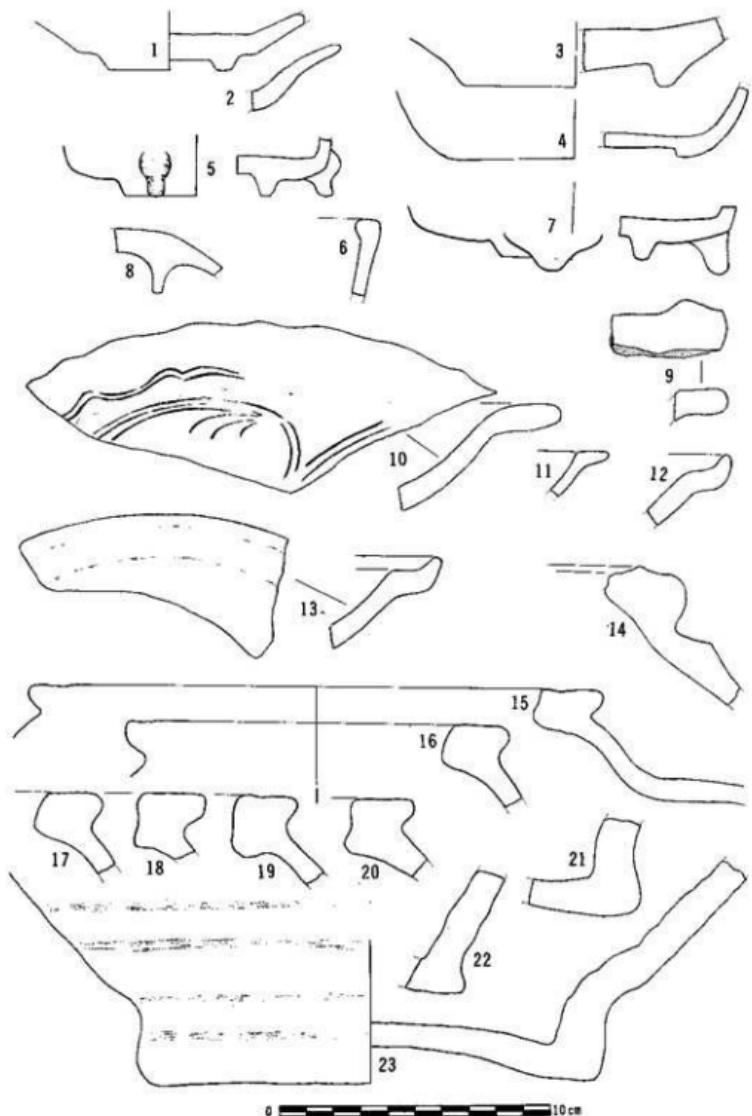
青釉

底部が3片得られた。いずれも碗である。1例は豊付に施釉せず、脚部には簡略化した蓮弁を描いてある。1例は見込にスタンプによるとみられる草花文がある。高台は欠失している。あと

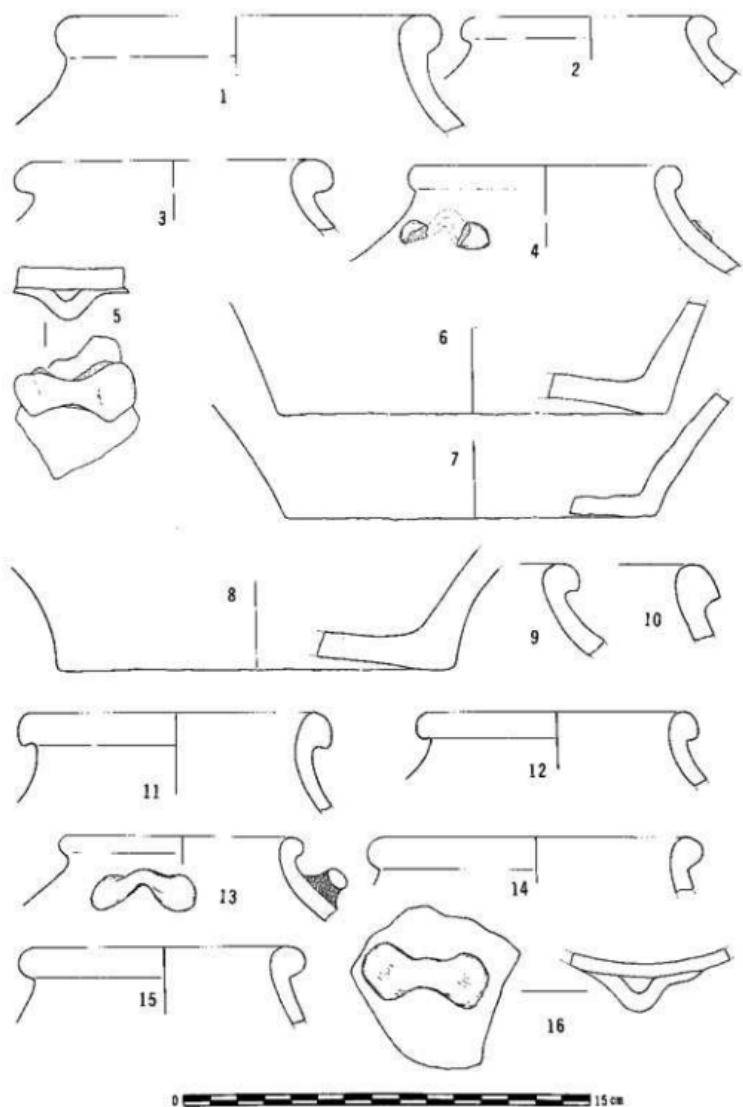
第10図 中国製青磁



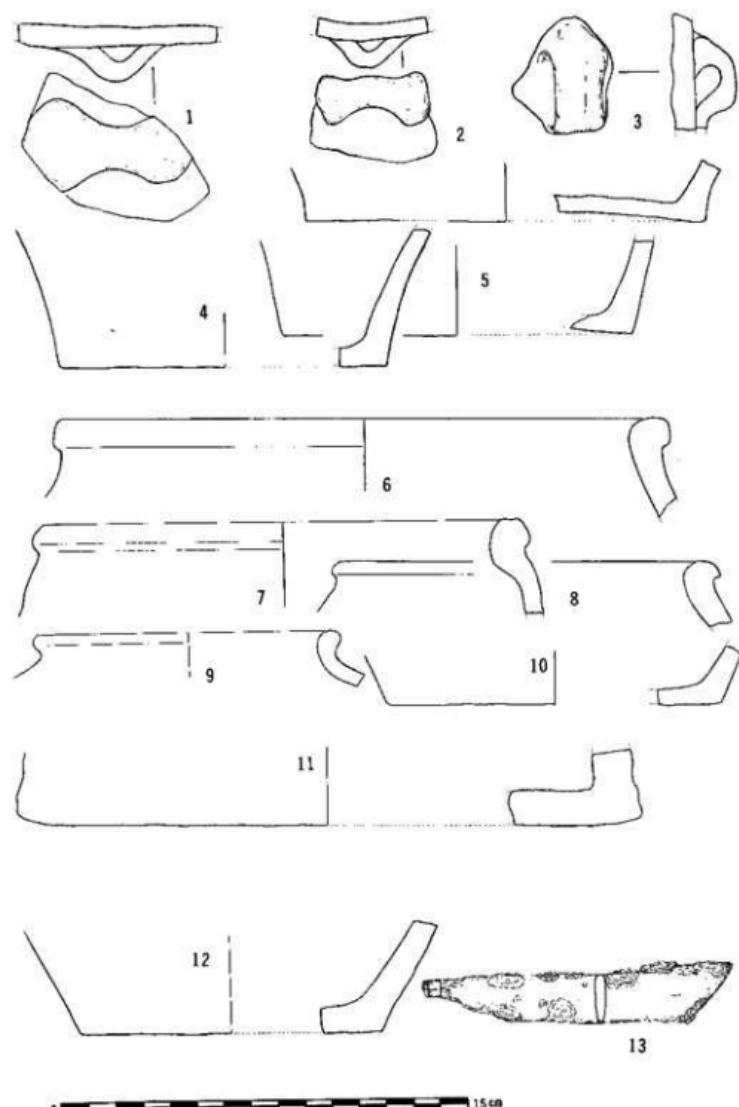
第11図 青磁(皿・鉢・盤・香炉), 南蛮陶器 I類



第12図 南蛮陶器II類



第13図 南蛮陶器 II・III類，刀子



0 15cm

の1例は見込に施釉せず、底部には釉を施す。高台は欠失している。素地は灰白色を主体とし気泡が多い。

鉛 軸

2片得られた。口縁の直立する薄手のものである。釉色は朽葉色を呈し、素地は淡灰茶色である。

染付

染付は遺跡全体として青磁片や南蛮陶片と比較するときわめて少ない。8片得られた。

直立する口縁片1、胴部片1、碗の高台片5、角盤の脚1片が得られている。高台の豊付には施釉されない。底部には施釉されている。外面および見込を中心とした内面に、コバルト色の文様が描かれている。文様の形状は第9図、図版21に見るとおりである。

素地は淡灰白色を主体とする。角盤の脚は16°C末~17°C初、他の7片は15°C末~16°C前半に属することである。

南蛮陶器

南蛮陶器は表採、発掘によって比較的多量に得られた。陶器類中でも南蛮陶器が殆んどを占める。器型を中心に、次のように分類される。

(1) I類A (第11図15~23・図版14)

比較的大型のカメで、頸部が内反し、口縁断面が方形状を呈する。口唇は平坦でその上は凹線をもつものもある。底部は平底で比較的厚く、やゝ雑なつくりのものもある。輪積み又は巻上げの痕跡をよく残すものもある。胎土には石英・長石等の粒を含む。

口縁片13、底部片17得られた。内外面とも鉄軸が施され、茶黒色~黒色を呈する。

(2) I類B (第11図14)

比較的大型のカメで1片得られた。口縁断面が三角形を呈し、口唇は平坦ではあるが、中央に棱線をもつ。頸部に弱い張り出しがあり、棱線をつくりだしている。肩部に、斜方向にタタキとみられる浅い条痕がみられる。内外面とも鉄軸が施され、黒褐色を呈する。

(3) II類A (第12図1~8・図版15)

中・小型の壺で、外耳が3~4個つくとみられる。口縁は玉縁状の断面をなし、口縁を外側に折り返すことによって、玉縁をつくり出している。底部は平坦な板の上で整形している。

外耳は肩部に水平方向に貼付されている。両端に指でおさえつけた痕がみられる。孔は貫通している。10例得られた。

外面にのみ軸を施し、鉄分を多く含む鉄軸で茶褐色を呈する。芯部は灰色を呈する。

口縁片21、底部片56得られた。

(4) II類B (第12図9~16・第13図1~5・図版16A・B・C)

形状はII類Aに同じである。芯部は赤色を呈する。軸はAと異なり鉄分を含む土灰軸を施し、暗緑色を呈する。外耳は1例のみ縱方向のものがある。(第13図3)

本類の陶片に、肩部に刻印を有するものが5片得られた。このうち3例については文字部を残し（第14図13・14・18・図版A・B）2例は「大吉」、1例は「宝旦」と読める。

口縁片25、外耳22、底部片14得られた。

(5) III類（第13図6～12・図版16D）

口縁の玉縁部がII類のような丸型を示さず、わずかに肥厚するものである。折り返しによつてつくられている。小型の壺とみられる肩部に屈折部をもつ。鉄軸を施し、茶黒色を呈する。胎土に石粒の混入が多い。口縁片7、底部片9得られている。

(6) IV類（第14図8～12）

中型およびやゝ大型のカメで、口縁片が11得られた。柘青でよく焼きしまっている。口縁には鉄分が溶けている。平縁の口縁で、横向し字状をなす。平縁上には一条の沈線がある。基本的には内面にのみ施釉するようである。この種陶器は沖縄窯の可能性もある。

その他の陶器

(1) 底部片1個

高台を削り出し、底部に布目痕を有するものである。（第14図7）剥離用の布を使用したのかと思われる。輪積み又は巻き上げの痕跡が内面にみられる。外面は施釉せず、内面に鉄軸を施し黑色を呈する。器厚からみるとカメ型に属するとみられる。

(2) 口縁片1個

小片のため器型は不明であるが、朝顔状に外反する口縁である。（第14図6）。鉄軸を施し茶黒色を呈する。

以上の陶磁器について、磁器に関しては青山学院大学の三上次男教授の御教示をいただいた。本遺跡の磁器類は14世紀末のものを若干含み、15世紀（前半）を主体とし、16世紀初頭に及ぶとのことである。陶器に関しては青山学院大学大学院博士課程、岡口広次氏の教示を得た。

末尾ながら両氏に対し深く感謝申し上げる次第である。

勾 玉（第14図15～17 図版17C）

大浜永直氏が字部オソでかけて採集されたものである。完形1、一部欠損2得られている。

玉

玉が4例得られた（第15図1～4）。いずれも孔を穿ち、同一直径のまゝ貫通している。

第15図1は直径7.5mm、厚さ4.5mm、孔径3.5mmである。外表面の殆んどに同心円のやゝ粗い条痕がみられる。色は水色系青色、表面採集品である。（図版23の12）

同図2は球状を示すがやゝ不整形で均一性がみられない。直径は最大で9mm、厚さ7mm、孔径2.8mmである。同心円の条痕がうすくみられる。素地は黒褐色で表面は黄白色を塗布して

あるが、かなり剥離している。石斂遺構内よりの出土である。(図版23の13)

同図3はクツベラ形状を呈している。長軸径最大12mm、短軸径最大7mm、孔径3mmである。表面全体に気泡が目立つが、熱などの何らかの影響によるものとみられる。色はコバルトブルーで透明性を有する。表面採集品。(図版23の10)

同図4はきわめて微細な玉であるが、均一性がある。直径2.5mm、厚さ2mm、孔径1mm、色は黄褐色を呈する。第3層出土である。(図版23の11)

骨 製 品

第15図1. 骨を円錐状につくったものである。挿入部を一段細くして削り出してある。尖端部は欠落している。全体に比較的シャープな切削面がみられ、長軸に沿って棱線をつくり出している。第I層出土である。(図版23の5)

第15図2. 上記の標品の先端部の如きもので、同様に長軸に沿って切削面と棱線がみられる。

第15図3. 1の例における挿入部が段をつくらず、削り出しによって漸次細くなっているものである。先端部は欠落しているが、基本的には1と同じ機能を要するものと思われる。石斂遺構内よりの出土である。(図版23の6)

第15図4. 扁平な骨に加工したもので、全形は窓えないが、片側が両端から削り出されている。直線部端は丸みを帯びているが、弧状の先端部にいくにつれて、シャープな刃状を呈している。第二層の出土である。(図版23の7)

第15図5. 側面に刃物による切削痕がみられるものである。第II層出土である。(図版23の8)

第15図6. 骨を刃物によって切削(切断)した痕がみられるものである。比較的シャープな痕跡である。第II層出土である。(図版23の9)

石 器

- ① 片刃石斧で体部は欠落している。断面が長方形状を呈し、刃部に向けてやや細くなる。角ノミ状の石斧である。厚さ1.4cm、幅3.1cm、刃部幅1.9cm。表面採集品である(第15図11、図版23-2)。
- ② 磨石 図版22に掲げた如き石器が表面採集で得られた。

鐵 製 品

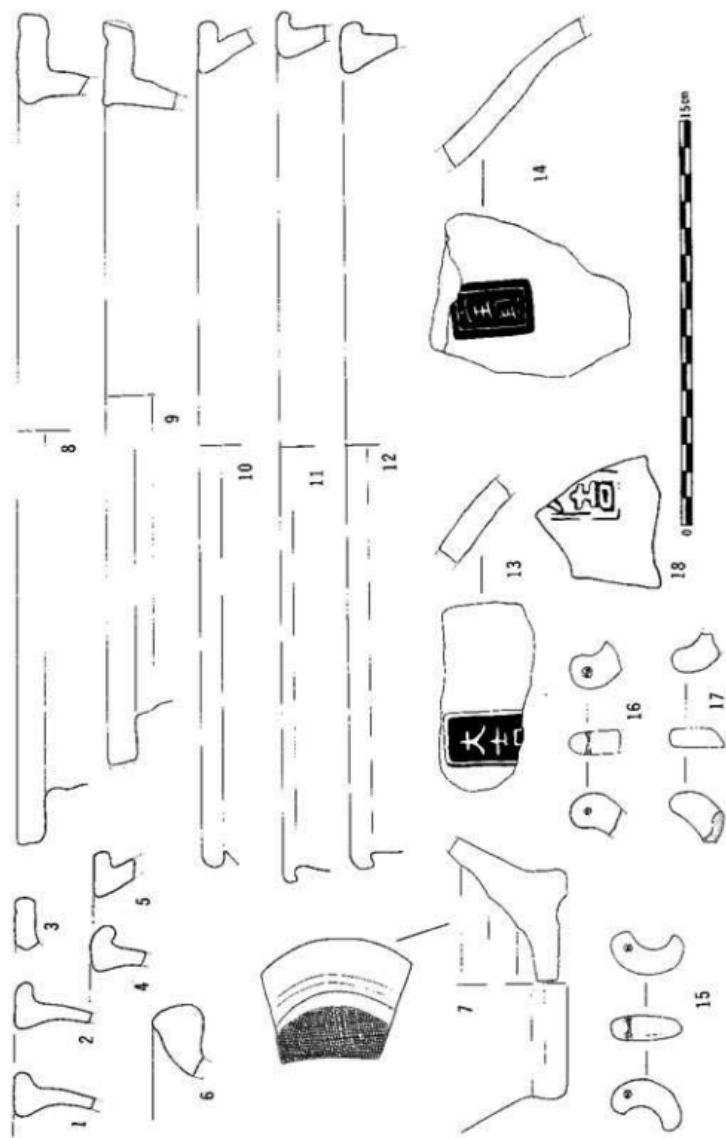
本遺跡から出土した鐵製品は1例である。

第13図-13は刃身の長さ8cm、幅1.5~2.0cmの刀子である。ところどころに銛化が進んでいるもののほぼ完全な資料である。切先の近くで角をつくり、これまでに沖縄本島のグンクから出土した刀子とは形状を異にしている。

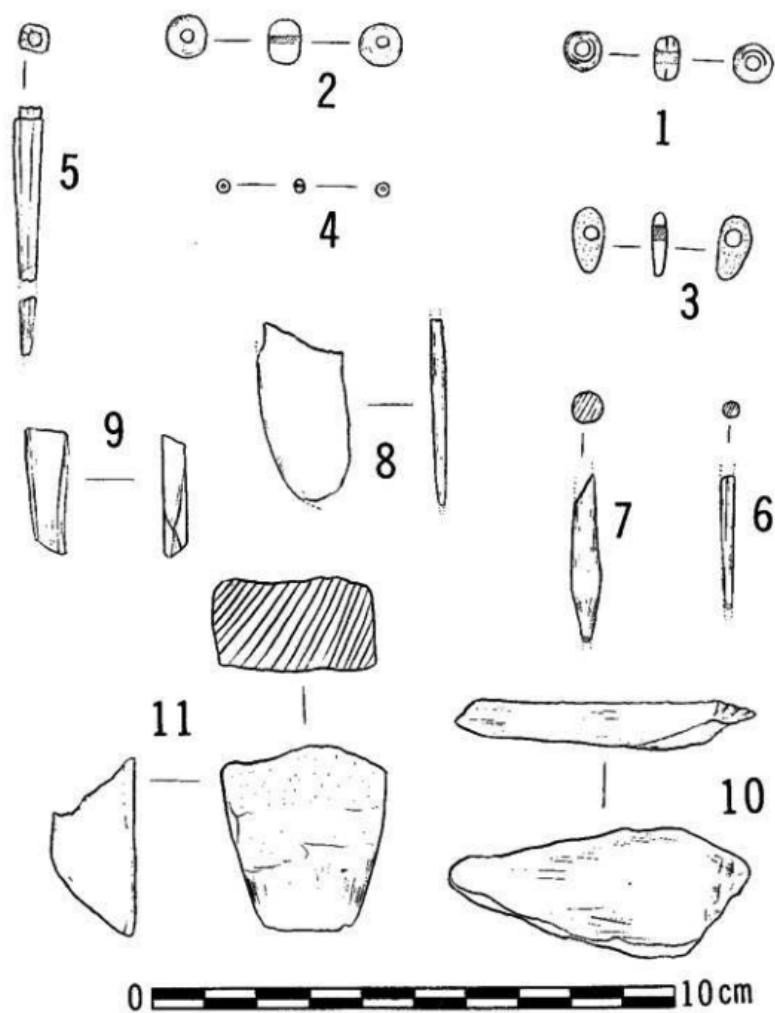
177 Rg 第II未擾乱部分からの出土。(図版23の3)

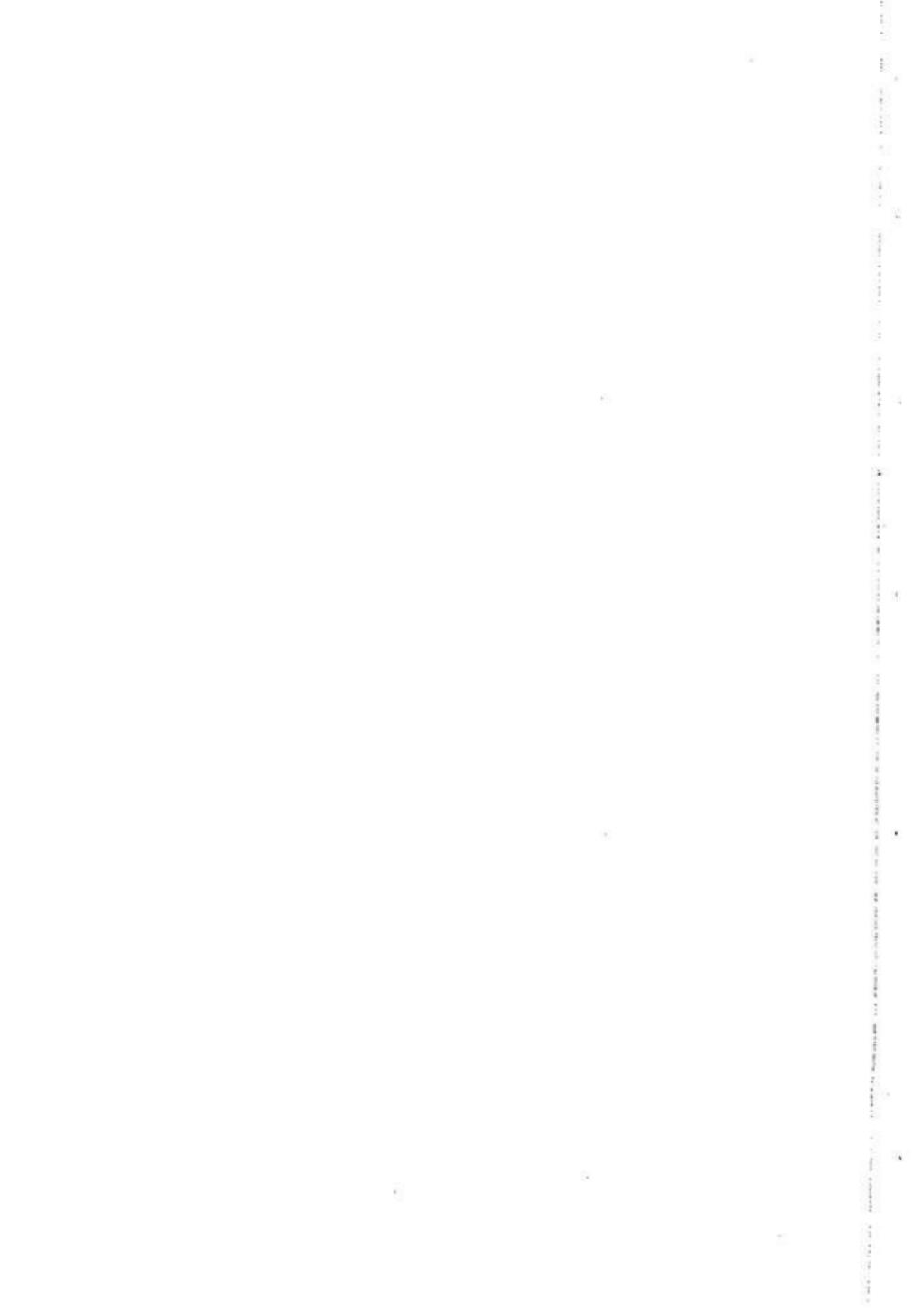
(安 里 銅 淳)

第14図 南蛮陶器（N頬・刻印その他）, 勾玉



第15図 玉・骨製品・石斧





B 自然遺物

イ貝類

- ① しらなみ *Tridacna (Vulgodacna) maxima* [RÖDING]
- ② ひめじやこ *Tridacna (chametrachea) crocea* Lamarck
- ③ はなびらだから *Monetaria (Ornamentaria) annulus* [LINNÉ]
- ④ まがきがい *Crassolea gigas* (THUNBERG)
- ⑤ やこうがい *Lunatina marmorata* (LINNÉ)
- ⑥ ひらまきいもがい *Planorbis Born*
- ⑦ はなまるゆき *Ravitrona Caputseptentis* (LINNÉ)
- ⑧ あらすじけまんがい *Tumidum* (RODING)
- ⑨ うんてついし
- ⑩ めんがいの一種
- ⑪ うらうずがい *Astralium haematragum* (MENKE)
- ⑫ ひろくちいがれいし *Drupa rubsideus* (RÖDING)
- ⑬ かにもり *Proclava Rochi* (PHILIPPI)
- ⑭ ちょうせんざえ *Marmorostoma argyrostoma* (LINNÉ)
- ⑮ あかいがれいし *Drupaspithulifera* (Blainville)
- ⑯ おにこぶし *Vasum tuvbinellum* (LINNÉ)
- ⑰ むかしたもと *Conomurex Luhanus* (LINNÉ)
- ⑯ おにのつのがい *Cerithium nodulosum* (BRUGUÈRE)
- ⑰ ごまふにな *Planaxis sulcatus* Born
- ⑲ じゅせいら *Septa hepatica* (RÖDING)
- ⑳ ちょうせんはまぐり *Meretrix Lamarckii* (DESHAYES)
- ㉑ おおじやこ *Tridacna (Flodacna) squamosa* (LAMARCK)
- ㉒ まるすぐれがい科の一種
- ㉓ じゅどうまくらの一種
- ㉔ てつれいし *Menathais distinguenda* (Dunkeretz lebor)
- ㉕ つのれいし *Menathais tuberosa* (RÖDING)
- ㉖ おおにこぶし *Vasum ceramicus* (LINNÉ)
- ㉗ ねじまがき *Gibberulus gibberulus gibbosus* (RÖDING)
- ㉘ あやめだから *Erosaria heluola* (LINNÉ)
- ㉙ おきなわうすかわまいまい *Bradybaena Bradybaena despecta* (SOWERBY)
- ㉚ あこやがい *Pinctada fucata* (GOULD)
- ㉛ じゃごう *Hippopus hippopus* (LINNÉ)
- ㉜ おおがんぜき *Microphyllus* (Lamarck)
- ㉝ はしきぬた *Cypraea (Mystaponda) uitellus* (LINNÉ)
- ㉞ さらさばてい *Tectus (Rochia) Connus* (GMELIN)

- ⑩ ほらがい *Charonia tritonis* (LINNE)
- ⑪ おにのきばふで *Mitra (Tiarella) papalis* (LINNE)
- ⑫ ひれじゃこう *Tridacna (Plodacna) squamosa* [LAMARCK]
- ⑬ やくじまだから *peribolus (Arabica) arabica* (LINNE)
- ⑭ いもがい科 *Pamyl Conidae*
- ⑮ ちびかにもり *Bittium craticulatum* [GOULD]
- ⑯ ながいとまきばら *Filamentosa* (RODING)
- ⑰ あんぽんくろざめ *Lithoconus Litteratus* (LINNE)
- ⑱ かわあい *Cerithideopsis djadjariensis* [KMARTIN]
- ⑲ しらいもがい
- ⑳ がんせきばら *Chicoreus (Triplex) brunens* (LINK)
- ㉑ えがい *Barbatia (Abarbtia) lima* (REEVE)
- ㉒ りゅうきゅうあまがい *Insculpta Recluz*
- ㉓ さんごにな *Ishimoria Lamellata Kuroda*
- ㉔ ゆおうはまぐり *Sulfureum Pisbry*
- ㉕ やなぎしばりいも *Rhizoconus miles* (LINNE)
- ㉖ にっこうがい科の一種
- ㉗ ぬのめがい *Periglypta Puerpera* (LINNE)
- ㉘ すじいもがい *Cleobula mimima* (LINNE)
- ㉙ せんにんがい *Telescopium telescopium* (LINNE)
- ㉚ にしきうず *Trochus maculatus* (LINNE)
- ㉛ こまだらいも *Virroconus chaldeus* (RODING)
- ㉜ こしだかさざえ *Marmorostoma stenogyrum* (FISCHER)

注 ××がいの一種とあるのは出土遺物が破片であるため、種別が判然としないものである。

このほか魚骨、黒骨があるが同定できなかった。黒骨にはウシ、イノシシの他サキシマハブの歯がみられる。

(高良鉄夫 琉球大学教授同定)

炭化麥等

第Ⅱ層の遺物包含層中から炭化麥と豆が出土している。出土状況は次のとおりである。153 Ps ピット第Ⅱ層石敷遺構内麦3粒。153 Pa ピット第Ⅱ層麦1粒と3片、153 Os 第Ⅱ層から豆1個。

(知念勇)

V まとめ

前章において各調査員の報告と考察を述べてきたのであるが、ここで遺跡や遺物についてこれまでに明らかにされたことの概要をまとめておく。

平得仲本御獄遺跡は、標高約20～25mの琉球石灰岩上に形成されていて、八重山考古学の第三期に編年される遺跡である。

遺跡の範囲は、戰時中の飛行場建設など数次にわたって破壊をうけ、正確にはつかみ得ないが、土器の散布状況からみて東西に100m、南北に350mの広がりをもつ遺跡であったことがわかる。今回の調査の対象地域は、そのうちの北半分に相当する部分であった。

土器の散布が密の部分にグリットを設け発掘を行なった結果、遺跡の西側において遺構の検出に成功した。それは東西に6m、南北に3mの範囲で石灰岩小塊を敷きつめた石敷遺構である。小石塊は第Ⅱ層褐色土層の下部から発見され、この石塊の層の上からは土器片が多量に発見された。その他には南蛮陶器、中国製の青磁等も出土した。

石の散布状況や遺物の出土状況からみて明らかに人為的に敷きつめられた石列であるという確認を得た。遺構のプランは略荷円形形状を呈している。柱穴や礎石の検出はできなかつたけれども土俗例等から推察して石敷住居址の可能性が考えられる。早稲田大学や青山学院大学によって発掘された山原貝塚の石組遺構、砂川元昌の石敷遺構と比較検討を行なう必要がある。今回検出された石敷遺構の場合には後世の擾乱で石組が抜きとられた箇所や、削平をうけたりした箇所が多く、全体プランをつかむことが困難であった。そのためにはその遺構から当時の住居の様子を復元していくことは容易なことではない。

調査で得た遺物の量は土器片が最も多く、南蛮陶器、中国青磁の順と続いた。その他には量は少ないがヤス状の骨製品・丸玉・刀子・石器等があり、米麦豆等の炭化物、牛の遺存骨、サキシマハブの歯も出土した。

土器片は総数6,042個で小破片が多く、復元可能なものはなかった。そのうちには表面採集による資料もかなりの量含まれている。器形や口縁部・底部から推定して大きく鉢形土器と壺形土器に分けられる。また、埴土中に含まれるテンパーから土器を観察すると、石英細片を混入する土器（A類）、貝殻細片を混入する土器（B類）の二類に分けることができる。

鉢形土器には浅鉢形土器と深鉢形土器があり、深鉢形土器の中には八重山特有の外耳把手の付された土器が多い。この種の外耳土器は、外耳の横断面と縦断面の形状からそれぞれ三類に分類される。その組み合わせを量的にみると横断面が半月形を呈するものと、縦断面山形状を呈する組み合せが最も多かった。

底部はすべて平底で、山原貝塚から出土した丸底の類は一例も検出されなかった。

陶器は出土量が土器について多く、いづれも南蛮陶器の類である。Ⅱ類Bに分類した陶器片中に、肩部に「大吉」、「宝具」とそれぞれ刻印されたものが発見された。この種の資料は沖縄の海外貿易を解明していく上で注目すべきものであり、貴重な資料の追加となつた。

中国製青磁の出土量もきわめて多かった。器種は碗または浅鉢に属するものであり、その他にわざかに皿・瓶・香炉等が発見された。染付も出土したが、その量は陶器・青磁片等に比べきわめて

少なかった。これらの中国製磁器の製作年代は、14世紀末のものを若干含み、15世紀前半を主体とし、16世紀初頭におよぶものである。

本遺跡は、今回の調査結果から中世の集落遺跡であるということが判明した。その時代は、土器や陶磁器から推察してはば15～16世紀の頃と考えられる。当時の沖縄は、日本本土をはじめとして中国、朝鮮、南方諸地域との海外貿易が隆盛をきわめた時期であり、出土したおびただしい量の陶磁器がそのことをよく物語っている。

この仲本御獄遺跡の周辺には、石底山遺跡・山原貝塚・フルスト原貝塚等陶磁器を出土する同時期の遺跡が數十カ所知られている。これらの遺跡と仲本御獄遺跡がどういう関係にあったのか、今後点在する集落遺跡間の相互関係についても詳しく調査をしていく必要があろう。

八重山における遺跡の発掘調査は、これまで僅か数カ所においてしか行われてなく、そのため原始・古代・中世の歴史像についてはほとんど知られていないというのが現状である。こういう学問的状況にあって、祖先の遺したかけがえのない遺跡を1つでも失うことは県民的な大きな損失である。関係者は、開発によって破壊されていく遺跡を保護するために最善の努力をしなければならないだろう。

なお、本遺跡については、今回の調査の結果をもとに県農林水産部と協議を行い、土地改良事業地域にかかる部分の遺跡範囲については盛土によって事業を実施していくということで了解がついた。これにより一応地上の環境は変貌するが、地中の遺構については残されることになった。

(当 真 国 一)

付

伝承に見る平得村の村落移動

目 次

- 1 はじめに
- 2 村落移動の伝承
- 3 ナカンドウ村に関連する伝承
 - (1) バイスツツオンについて
 - (2) ニスヌツツオンについて
 - (3) フナムルについて
 - (4) 薩田トマースクについて
 - (5) 宇部オンについて
 - (6) 新本井戸について
 - (7) ナカンドウ村跡の消えた井戸
- 4 史的考証のこころみ
 - (1) 平得村の発祥地について
—バイノーラ説への疑問—
 - (2) ヘーギナー村落時代
 - (3) 新城原村落時代
 - (4) カジヤフティ村落時代
 - (5) ナカンドウ村落時代
- 5 今後の課題 —— むすびにかえて

1 はじめに

平得村の村落移動については、喜舎場永助、宮良安彦両氏によって、すぐれた研究が発表されている。

ここに発表するのも、両氏の説を参考にしつつ現存する平得村の古老を尋ね調査したものである。しかし学年末の忙しさと砂糖キビ収穫の農繁期とかかちあい、それに流感がはやり、調査対象にしていた古老達から十分な調査ができなかつたこと等、不利な条件が重なつたことは残念である。

また、調査期間のため、伝承のみの調査に終り、祭りや古語、平得村の村落構成等の調査ができず、一面的なものになってしまった。したがつてこの研究は中間発表でも初步的なものである。今後の総合的な研究によって、平得村の村落移動の歴史とナカント村遺跡の歴史的な意義が解明されることを期待する。

2. 村落移動の伝承

昔のことである。この島に大地震があった。地震がやむと日夜七日間、天から火雨が降って来た。この火雨のため島の生きとし生ける物ことごとく死んでしまった。

ところが、この火雨の災をのがれて生き残った2人の兄妹がいた。この兄妹は火雨が降って来たので、一目散に逃げてヘーギナー川沿にある岩陰に入った。丁度その時である。南北にあった巨岩が二人を覆うようにして倒れて来た。二人はもうだめだと思った。ところが、不思議なことに火雨が降り止むとその巨岩は両側に開き、青い空を見せてくれた。二人ははじめて火雨の災から助かったことを知り喜んだ。この兄妹が気がつくと、二人を火雨の災から助けた巨岩の間には水溜ができていた。それは深い淵のある青い空を写すきれいな池であった。この池が平池と呼ばれている。

兄妹は、この平池の水を飲んで生活していた。島に生き残ったのは二人だけであった。二人は兄妹の仲であるので、夫婦になれず出っていた。二人はどうにかして子孫が授かるよう神に祈願していた。すると白鬚白髪の老人が二人の前に現われ、二人を井戸の口に連れて行き、それぞれ反対の方向へその周囲を廻り、互いに手を握り合うよう命令した。二人は老人の命するまま井戸の口を廻り巡り合う地点で交互に手を握り合った。老人は「これによってあなたがたは子宝に恵まれる、それをもとに子孫繁昌しなさい」といい残して消えた。

このようなことがあって、しばらくすると不思議なことに妹が懷妊した。老人に言われた通り、これから子孫が繁榮し、このヘーギナーの平野で村落を形成していくことである。

ところがここはヘーギナー川の近くで、マラリヤ病がひどかったので、シーナ川と越えて更に南の台地、新城原に移転し、新城村となつた。新城村跡には、村人たちが使用した新城原井戸といふ降り井戸がある。

この新城村も更に南の上原のウイスヌウズあたりに移転したカジヤフチ村と改名した。ここにも、村人たちの使用したウイスヌウズ井戸という降り井戸があったが、今はほとんど埋められている。この頃、鍛冶屋もあったと伝えられる。

このカジヤフチ村も、更に東南の低地で農耕に適するナカタ原に移動し、ナカンドウ村と改名した。この村には降り井戸（？）があった。その頃ナカンドウ村には、ウーリ家の先祖の七人兄弟がいた。彼等は武勇にすぐれ、強力者で村の東西南北の入口に家敷を定めて村を守っていた。だからナカンドウ村は、外敵からの侵略に一度も会うことがなかった。

ところがこのナカンドウ村も村番所まで建築してあったが、人頭税の収納や販元からの交通が不便だったので、七人兄弟のリードによって、現在の平得村へ移転した。オーリ家をいうのは、村移転のとき、七人兄弟が村人にここに村を寄せておいで（オーリ）と呼びかけたのに由来する家号だといわれる。

七人兄弟は、村移転して、長男の舟屋儀倉真の屋敷内で掘り抜き井戸を造るのに成功した。これが平得村ではじめて出来た掘り抜き井戸でアラムティミ井戸と呼ばれた。

この時出来た平得村は、大阿母オンの北側から宇部オンの前のウーリ家あたりまでの村であった。この村は村の発祥地、平池の「平」にちなんで平村と命名されたといわれる。しかし、後世に首里王府の命令で二字の平得村と改名されたと伝えられる。

3 ナカンドウ村に関連する伝承

(1) バイスフツオンについて

周囲約60メートル四方の境内を持つオノである。沖縄開発庁八重山総合農業開発調査事務所の東北の地点約300メートルの所に位置する。このオノはナカンドウ村の南入口にあたる所で、七人兄弟の中の一人の屋敷跡だらうと言われる。このオノは別名シクナマウガシともいわれる。これは原名による名称である。現在はバイスフツ、ニヌフツオンともいう。それは、ニヌフツオンが飛行場造りのため戦前消えたので、それをバイスフツオンにまとめたためにこう呼ばれているとのことだ。

香炉は一つであるが、祭りの時は一つの香炉に必ず二組の線香を立てる。

祭られる神はオーリ家の七人兄弟の中の一人である。その方は行く方がわからずに死んでしまったといわれる。だから境内には積石の墓もない。祭りの時の供え物（レーサン）もナイムルや、當田トマースクに供えるレーサンより二つ少ない。⁽⁴⁾

(2) ニヌフツオン

現在なくなっている。第二次大戦中、その跡は飛行場を造る時消えた。バイスフツオン北方約400メートル地点の排水溝近くにあった。だから、現在、バイスフツオンと一緒にしてこの神は祀ってある。オーリ家の七人兄弟中の一人だといわれる。ナカント村の北口にこのオノは当たるとのことだ。⁽⁵⁾

(3) ナイムル

八重山総合農業開発調査事務所より北西40メートル位に位置する。周囲約36メートル四方の広さの境内をもつムルである。境内の中央に半円形の石積墓がある。その前に香炉が台石の上に置かれている。墓の大きさは直徑3メートル位、奥行き2メートル、高さ約90センチメートルである。舟屋儀佐真の骨を納めた骨瓶が入っているという。この舟屋儀佐真は七人兄弟の中の長男だったといわれ、王皿とも呼ばれていた。

舟屋儀佐真の呼称については二つの違った伝承がある。一つの伝承は、人頭税の頃、貢物を船屋に集結し、それを盗難から守って船に積むまでの責任者であったから儀佐真の名称に舟屋がつけられた。⁽⁶⁾もう一つの伝承は、アラムティミ井戸を掘るとき、フナウラを造り、多良間嶺の下の水元の神水を、そのフナウラに入れて、夜の中に人目につかないように密に牛に引かして来て、井戸掘りの竣工祈願水とした。それにちなんで、儀佐真を舟屋儀佐真と呼んだ。⁽⁷⁾

(4) 喬田トマースク（ハカ）について

ナイムルの少し北よりの西方100メートル位の地点に位置する。周囲約36メートル位の境内である。境内のはば中央に三段の石積墓がある。墓石の南側の台石の上に香炉が置かれている。墓の大きさは、2メートル正方形で高さは90センチメートルである。中には骨の入った骨瓶があるといわれる。中央部は海のカサ石でふたしてあるというが、それは確認されなかつた。このことは、戦時中、ナイムルの墓もこの墓も開け、その骨瓶を字部オノの境内に移したので確かだということである。

墓の東側に接して力石が置かれている。この石は直徑50センチメートルくらいのやや直方体の緑色岩で、その上に同石質の岩片4個が置かれている。

嵩田トメーの名前については次のように伝承されている。タケダは原名である。トメーとは探すとか求める意味である。すなわち、タケダトメーとは、嵩田に田畠を初めて拓き求めた人の意味で、それから名づけられたという。

タケダトメーは、怪力の持ち主であったと伝えられる。それについては、嵩田で田畠を拓いた時のことや、前記の力石をキーパイ（木の鍬）の柄に田畠から抜いで来たこと、また農民の知恵とその怪力で宮古の豊見鹿と我慢くらべをして勝ったこと、更には沖縄の武士が角力を挑んで怯んだ話等が伝承されている。⁽⁶⁾

(5) 宇部オンについて

このオンは、フナイモルと聯合開発農業調査事務所を背にして、産業道路に向したところに位置する。境内の大きさは周囲約200メートル四方である。鳥居もあり、中庭にはウガン所が立ち、その後方にはイビがある。八重山の御嶽一般に見られる形式のオンである。このオンの成立については次のように伝承されている。

昔、ウーリ家の娘が西宇部家に嫁入りした。その頃、新川の唐家の娘が大兵に嫁入りし、現在の大浜村の北西後方にあるミズオンあたりで自然石の珍しいものを拾って来て、信仰していた。すると子孫は繁昌するし、作る作物もよく伸び。その信仰の恩みを受けていた。それで宇部家に嫁入りしたブナリも、その石を分けてもらい、イビに安置してそれを信仰するようになった。これが宇部オンの初まりであると伝えられる。宇部家の娘が信仰したので宇部オンと名づけ、その娘はオーリ家の娘で最初の司であったのでオーリブナリと呼ばれた。⁽⁷⁾

宮良安彦氏の研究の中には、この宇部オンは七人兄弟の屋敷跡で、彼等の引手の墳古場であったとの記録が見えるが、筆者の調査では伝承の中にそれを聞くことができなかった。⁽⁸⁾

(6) 新本井戸について

この井戸は、宇部オンの西方30メートル位の所に位置する。昭和25年建立の井戸顕施碑が立っている。その碑文の起草者は喜舎場永向氏である。

この新本井戸については、次のように古老たちは伝承している。この井戸は第一家の先祖七人兄弟によって、長男舟屋儀佐真の屋敷内に掘られた。平得村で初めて造られた掘り抜き井戸である。普通はツンナーカーと呼ばれる。ツンとは釣瓶のこと、昔はクバの葉を丸くして作っていた。ナーとは繩のことである。つまり、ツンナーカーとは釣瓶に綱をつけて水を汲む井戸の意である。これに対してウーリンカーというのがある。これは、下りて行って水を汲む井戸の意味である。この井戸の正式の名称はアラムティミカーである。それに新本井戸の字を当てるのは適当でない。新本の字を当てたのは喜舎場先生で、これはいつか訂正しなければならない。アラムティミカーというのは、新しく求め得たツンナー井戸の意であるから、字を当てるとすれば新求め井戸でなければならない。このアラムティミ井戸は、雨乞いの謡（新本ヌチャチ）の中でもうたわれている。この謡の中に「多良間カイ、夜フキシヨウリ、水納カイ、ユチリシヨウリ」と謡う所がある。これは多良間、水納に行ったということではない。アラムティミ井戸を掘る着工の時、舟屋儀佐真がフナウラ（深田あたりで使用される舟型のソリのようなもの）をつくり、夜中、密かに人目をさけて、それを牛に引かせて行って、マイシ岳の多良間橋の下の水元の水を汲んでそれに入れて来て、井戸の竣工祈願の祝い水とした。このこと

を、あの滝の中では語っている。あのナウラのことを夜フキフニという。また、このように持つて来る水のことをウモル水という。

昔から多良間滝の下の水は、どんな旱魃にも渴くことがなかったので、長い旱魃が続くと先祖たちはそここの水を汲んで来て飲み水に使っていたといわれる。それで、現在でもその水元の神へカーラヨーズ（祝）という祭りを九月頃いってやっている。^註

(7) ナカンドウ村跡の消えた井戸について

バイヌツォンの北方 150 メートル位のところにあったといわれる井戸である。戦前は砂糖キビを積み、運搬するトロッコの線路がすぐそこの井戸の側を通っていたという。ところが戦事中、飛行場のため埋められてしまった。この井戸については降り井戸、掘り抜き井戸の二説がある。

一つの伝承者の説はこうである。戦前のことで、昭和何年頃のことであるかわからないが、あの井戸に慶田盛家の牛が落ちて、村中大騒動をしたことがわかった。その時、その井戸をのぞいて見たら、確かに降り井戸であった。^註

あと一つの伝承者の説は次のとおりである。その井戸は井戸口の小さな掘り抜き井戸であった。古い井戸は口が広いが、この井戸はそう古い井戸とも思われなかつた。自分たちの子どもの頃（伝承者は現在 65 才）、あの近辺に本土の方で川勝という姓名の一家が住んでいて、あの井戸を使用していた。だから自分の見た井戸は掘り抜き井戸であった。牛の落ちるような井戸ではなかつた。もとは降り井戸であったのを川勝が掘り抜き井戸形式に造りなおしたのか、あるいは別に降り井戸があったのか、そのへんの事情はよくわからない。川勝一家はその後ペギナーに引っ越して行って、あちらで住んでいた。^註

4 史的考証のこころみ

以上の村落移動の伝承とナカンドウ村に関する伝承は、平得の古老数人の伝承を喜舎場永向、宮良安彦の研究を参考にしつつまとめたものである。伝承者の中には、この両氏の研究の影響を受けていると思われるものもあつたし、更に両氏の研究への反論の形で、伝承を語る方もいたことを付け加えておく。^註

この伝承の史的考証をする上には、まだいろいろな問題点がある。しかし、文字による記録的な資料の存在が認められない今日、こういう差での伝承と考古学的な発掘調査による結果を待つ以外、その史実の解明は今の所不可能のようである。

ところで、本稿では以上の伝承について、いろいろな問題点を予測しつつも、史的な考証といつたら大げさだが、それをこころみたいと考える。伝承についての調査研究の足りなさを感じつゝも、これが今後の考古学的な研究の成果とどう結びついていくか、筆者の関心大なるものがある。ひそかに期待したいところである。

(1) 平得村の発祥地について

—— バイノーラ説への疑問 ——

喜舎場永向、宮良安彦の研究によると、平得村の発祥地は金武岳の東南のバイノーラであるといわれる。しかし筆者の伝承調査では、バイノーラ説は出てこなかつた。また、表面的な階

查であるが、パイノーラにはそれらしいき遺跡は認められなかった。パイノーラの南方約2800メートル地点の大野部落のコンビラ板附近からは、石斧を表面採集で得たことは聞いている。またそれより南方の伊野田小学校の北側の川原沿や南西の祠窟や畠中から曲玉、石斧が出土していることは確認されているが、パイノーラからこのような遺物が拾われたということは聞いていない。

平得村とパイノーラの関係については、古老たちは、月夜浜ユンタとの関連で伝承している。⁽¹⁰⁾ ハンナ大主はヘーギナ田を開墾した。ところが田圃が川の水面より約5尺ほども高くなっていた。水が引けなくなって困っていた。そこで、新本家の先祖はチビ田から溝を造り、川の上はビイ（木を削いて造る桶）をつくって通して水を引くことに成功した。これによって新本家の先祖はハンナ大主に認められ、ハイノーラ近辺の金武牧場の管理責任を牧場の権利の一部まで与えられた。それで牧場内に管理小屋をつくり、時々泊って管理するかたわら、その土地を借り受け綿花の栽培もしていた。その頃、月夜浜ユンタは生れたと伝えられる。それ以外にパイノーラと平得村の関係はなく、村の発祥地がパイノーラであったということは、聞いたことがないというのが古老たちの言葉である。⁽¹¹⁾

この伝承によると、新本家の先祖がパイノーラとかかわりあいを持っていたというのはハンナ大主の時代である。ハンナ大主は、その墓碑によると童名は保久理で石垣宗延のことであり、康熙38年（1699年）71才で死去されている。35才で頭役になり、14年間くらい務めているのが見える。⁽¹²⁾ 新本家の先祖がパイノーラで牧場管理をまかされたのはほぼこの頃だと考えられる。これと平得村の発祥とは時代的にも結びつきそうである。やはり、平得村の発祥地——パイノーラ説には疑問が残る。

（2）ヘーギナ村落時代

古老たちは、平得村の発祥地を執拗なほど平池だと主張する。平池の伝承はそう多くの方々に知られていないようだが、発祥地としてはその伝承を知らない古老でも、やはり平池と伝え聞いているという。平池のこの伝承は、古事記や他の多くの島々の創世紀的な伝承と共通したものを持っている。確かにこの平池は平得村の発祥地ではなくても、その村の形成起源に重要な関連を持っていたであろうと考える。

平池の位置は、宮良川の河口より約200メートル位西方にあり、ヘーギナ川沿いにあって、その水位の変化によって出来たと思われる不定形の池である。池はその伝承にある通り南北の巨岩の間にある。この池の位置する南面側は断崖になっていて西方へ延び、その上からヘーギナーの平地が続く。この断崖には自然洞窟があり、古老たちは伝承の中の二人の兄妹はここを住み家としていたのであろうという。

戦後まもない頃、この断崖沿いを採掘した嵩原玄吉という土木業者がいて、その際多くの石斧や遺物の出土があったと伝えているが、筆者はまだ確認していない。この平地の溜り水やヘーギナー川の地表水を使用しながらこの近辺に石斧を用いる人々の村落があったのはまちがいないようだ。また、このヘーギナーの位置が大浜の北方海岸から約2,000メートル位も離れた所に所在すること等を考えると、漁獲という自然採集時代を脱しつつ農耕生活へと移行していく頃の村落ではなかったかと考えられる。

(3) 新城原村落時代

ヘギナーの平地は、八重山農業試験場や熱帯農業研究所等があって、現在では石垣島の農耕地の中でも一等級である。於茂登やパンナ一岳のふもとに水源をもって小川をなすところが多く、近くには水田もある。しかし、マラリアのあった頃このあたりは湿地草原をなすところもあったであろうし、現在とはだいぶ違う土地柄ではなかったかと考えられる。それでヘギナー村は伝承にあるように、スイナー川を越えてさらに南の台地、新城原へ村落移動を余儀無くされたのではないか。これと共にまた、農耕生産活動がすすむにつれ、外敵の侵略に対応する原始的な防禦上の手段が台地への移動の原因となつたのではないかと考えられる。しかしこれはあくまでも推測である。それに新城原へ移転する頃はすでに降り井戸をつくる技術と知識ができていたのである。これも台地への移動を可能ならしめた要因であつただろうと思われる。新城原井戸の遺跡としての存在はこのことを暗示しているように思われる。

この新城村は東に隣接するブンネーマあたりまで広がる村であったようだ。戦前まではこの新城原やブンネーマには家敷跡らしき跡が見られたとのことである。ブンネーマには、ブスヌヤーカツ（武士の家垣）と呼ばれる広い石垣囲いの家敷跡もあったと伝えている。¹⁰

このようなことからすると、新城原村落時代は農耕生産活動もすすみ、外敵の侵略を意識して防禦対策を立て、村落の指導者ブスと呼ばれる英雄も存在し、降り井戸をつくる方法を身につけた頃だということが推測可能になってくる。

(4) カジヤフチ村落時代

上原は新城原に隣接する所である。南方のウイスズ、マフタまでも 1,000 メートルとはへだたっていない。すなわち新城原に続く台地である。ここにカジヤフチ村があったという。この村落は新城原村落と時代的にもそう大きなへだたりはないようと考えられる。伝承上もこの両村落は混線したりして、そう大きな違いを感じさせない。水の生活もウイスズ井戸という降り井戸である。

しかし、この村の伝承の中に鍛冶の初まりが見られたることは、史的考証の上に大きな意味を与える。鍛冶のはじまりは、鉄製農具の初まりであると考えられる。これが農耕生産活動に大きな革命的变化をもたらしたこと、村落社会にも大きな変動をおこしめたことは想像に難くない。またこのことがカジヤフチ村落をより農耕に適した東南の低地ナカタ原へ移動せしめた大きな原因だと考えられる。

カジヤフチ村落時代は、以上のことをまとめてみると、水の生活では降り井戸時代であったが、農耕生産活動では鉄製農具が使用されはじめ、それをいち早く手に入れた者が村落の英雄となりつつある時代で、社会的にもより農耕に適する土地柄を求める段階の時代であったと思われる。

(5) ナカンドウ村落時代

ナカンドウ村はバイヌツォンを南東の境に、ニヌヌツォンを北東の境に、また西南の境は舟屋儀佐真の屋敷跡、アラムトゥミ井戸の近辺であったようだから、ずいぶん大きな集落を形成していたと思われる。農耕生活を中心であつただろうし、カジヤフチ村落時代から嚴治もあったというから、鉄製農器も本格的に用いられていたであろう。それに集団の指導的な存在七兄弟なる英雄の出現も伝承されていることから、これまでの原始的な貧富の差のそれほどない小集落的な時代を脱していったとも考えられる。しかし、この七兄弟については七都宮の神への信仰からきたという思想と関連があるようで、七人が実在の人間であったかどうかは定かではない。また、すぐれたリーダー的な英雄のいる共同体には七人兄弟という形容でその英雄が伝承される例は他にも見られる。ともかくこのナカンドウ村にも七人兄弟といわれる血族体の英雄が存在したのは史実のようだ。

カジヤフチ村からいつ頃ナカンド村へ移転したのか、またナカンドウ村落時代はいつ頃なのか、今は歴史的な資料によることは不可能のようである。しかし、鉄製農具が用いられていたことや、またナカンドウ村時代のある時期までは降り井戸を使用していたであろうが、英雄の一人儀佐真が初めて掘り抜き井戸を造ったことなどは時代考証につながりそうである。また、儀佐真が人頭税の貢納物の船積みまでの責任者であったという伝承や岩田トゥメーの田園開拓の伝承（鉄製の鍬で開拓したのではないか）、さらにこのトゥメーの権力の伝承の中に宮古の母見親が現われること等、その辺からなにか時代的な考証につながっていくような手掛りが得られそうに思われる。

ここで水の生活に焦点を当ててみると、ナカンドウ村落時代を仮に前期後期に分けた場合、多分に前期は降り井戸があつただろうと考えられる。ナカンドウ村中には降り井戸が存在しなかったと仮定しても、七人兄弟と関連を持つといわれる降り井戸がバイヌツォンの南方約600メートル位の所にバイナーカーと呼ばれて存在する。この降り井戸は石垣市教育委員会によって文化財に指定されている。現在この降り井戸の祭りはウーリ家によって行なわれている。

このバイナーカーの名称はおそらく村の南にある井戸という意味で命名されたものであろう。そしてナカンドウ村の前期の人々はこの降り井戸の水を使用していたであろうと考えられる。

ナカンドウ村の後期は、その伝承からしても掘り抜き井戸の技術が入った頃ではなかったかと思われる。そこで八重山ではいつ頃から掘り抜き井戸が造られるようになったかということが問題になってくる。

球陽の記録によれば、尚貞26年（1964年）に渡久地親雲上政包が八重山に来て、その蔵館寺院を瓦葺きに改築するとともに、「郡邑ニ穿井アルコトナシ、皆溪水ヲ用井人多ク疾患ス」ため初めて穿井の方法を教えたというのが見える。これによつて初めて掘られた井戸が4カ字では、石垣の中のハカのジラバカのソウソウマカーだろうと言われる。このソウソウマカーを掘るときその井戸の後工折顛の時にジラバが語われ、それがソウソウマカージラバとして今日まで語り継がれている。

舟屋儀佐真の屋敷内に掘られたアラムトゥミカーモこの頃掘られたであろうと思われる。そ

の名称や伝承からしてもこの井戸が平得で初めて堀られた井戸であることはまちがいないようだ。この井戸を脇ることと関連して謳われた「新木フチ」という古謡がある。この古謡の形態がソウソウマーカー・ジラバと類似するものを持っていること等を見ても、このアラムトウミカーナーがこの噴掘されたであろうと考えられる。

このアラムトウミカーナーと呼ばれる堀り抜き井戸の出現がナカンドウ村の村落移動に大きく原因したのではないだろうか。降り井戸から堀り抜き井戸への発展は現在の水道の出現以上に進歩的な出来事ではなかったかと考えられる。地下深く何十段もの石段を大事な得がたい水堀を頭にのせて、上り下りしなければならなかった水の生活からの解放は想像にあまりあるものがあったろう。堀り抜き井戸の出現が村落移動の大きな要因となったということもあり得ることである。もちろんこの頃の村落移動には社会的なあるいは村落の行政上の要因もあったであろうが、このアラムトウミカーナーを造ることに成功したことがオーリ家の先祖たちをしてナカンドウ村の移転を呼びかけさせることとなつたのではないかと考えられる。

こうして移転した村は平村と命名された。この平村の命名もアラムトウミカーナーと呼ばれる堀り抜き井戸が出来て、水の生活がナカンドウ村時代とちがい便利になったので、その村の発祥地、平池が水の得やすい所であったため、それにちなんで命名された村名だとも考えられないことはない。

ところがこの平村の近隣にはかなり古い時代から小集落的な村があったであろうことは、大阿付オンの存在や安堵大主、ナランザト等の伝承からも考えられる。それに南方には真栄里村の旧村といわれる小集落もあったであろう。これ等の小集落が平村に統合されて大平村（ウフビサイ村）となって発展していったのではなかろうか。これが後には首里王府の命により二字姓の平得村となり、また、真栄里も分村しただろうと考えられる。

しかし以上のことは、井戸に焦点をあてての考察であって今後、他の面から総合的に研究され、平得村の歴史がますます明らかにされるであろうことを期待する。

5 今後の課題——むすびにかえて——

これまで述べてきたものは伝承をもとにしてその村落移動を見ながら、井戸に焦点をあてて史的考証といったら大げさだが、それを試みてみた。しかしそこには多くの問題点が残されたままである。

まず、この伝承にあるような村落移動が史実としてあったのかという初步的な疑問も起きてくる。各村落の年代的なことが明らかにされない以上、この疑問は残る。あるいは伝承される各村落は同時代かあるいはそうへだたりのない時代の遙った共同体で、それがマラリアという自然的な要因となる社会的な事情で平村へ集結統合されていったという考え方も推測可能なことである。やはりこの点、大きな課題であり、今後、これらの村落跡の考古学による実証的な研究が待たれる。また、ナカンドウ村と平村の成立について多くの問題点を残している。

ターダブナリと平村とはどのように時代的につながるのか、トニモト家と言われる所と平村の成立とはどうかかわり合うのか等も今後、研究解明されなければならない大きな課題である。

おわりに、本稿をまとめるのにあたって、お忙しい中を御協力下さいました平得村の方々に感

謝申し上げるとともに、故喜舎場水而氏・宮良安彦氏の学恩に深謝する。

- (1) 伝承者 蔡下真知・鳩間正一
- (2) 堀り抜き井戸であったとの伝承もある。
- (3) 伝承者 注(1)の外に波照間督治、鳩間満喜、西本貞治、西本マツ、宇里真成、宇里カマド。
- (4) 伝承者 西本貞治、宇里真成
- (5) 伝承者 蔡下真知、宇里真成
- (6) 伝承者 宇里真成
- (7) 伝承者 鳩間満喜
- (8) 注(3)と同じ。
- (9) 伝承者 宇里真成
- (10) 宮良安彦「平得・真栄里両村の村落移動と諸御嶽の來歴」琉大史学第3号、1972年。
- (11) 伝承者 蔡下真知、鳩間満喜、西本貞治、鳩間正一
- (12) 伝承者 西本貞治、西本マツ
- (13) 伝承者 注(1)と同じ。
- (14) たとえばナカムトウミ井戸の伝承
- (15) 喜舎場水而「八重山歴史」43頁、175頁。
- (16) 喜舎場水而「八重山民謡誌」157頁。
- (17) 伝承者 注(3)と同じ。
- (18) 墓碑「石垣市立八重山博物館保管」
照普月秋居士前石垣親雲上宗延氏長多竜名保久理歳十七与人三拾一首里大屋子三十五頭
役四十八御座浦五十三總居康熙三十八年己卯十月十七日卒寿七十一才
- (19) 伝承者 鳩間正一
- (20) 福村貴教「官古島庶民史」159頁。
- (21) 石垣市教育委員会編「八重山の文化財」第二集、1974年刊
- (22) 桑江克英「球湯」120頁
- (23) 喜舎場水而「八重山古謡」上巻、157頁
- (24) 注(23)と同じ。422頁
- (25) 注(18)と同じ。

(伊波寛)

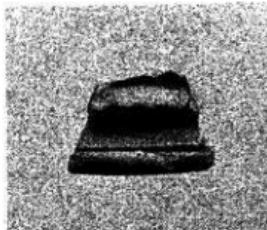
図 版

染付

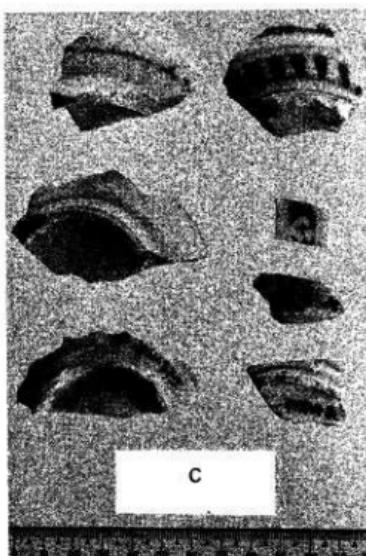
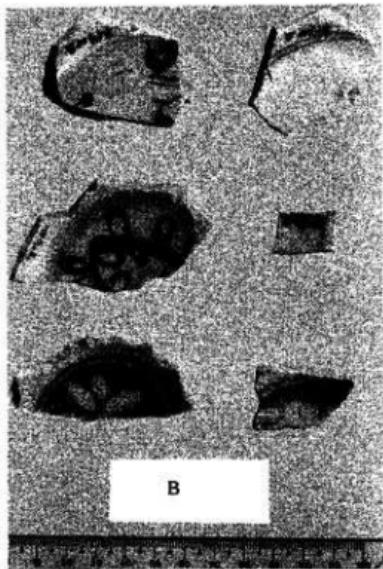
A 角盤

B 碗高台又は外面

C 碗見込み又は内面



A



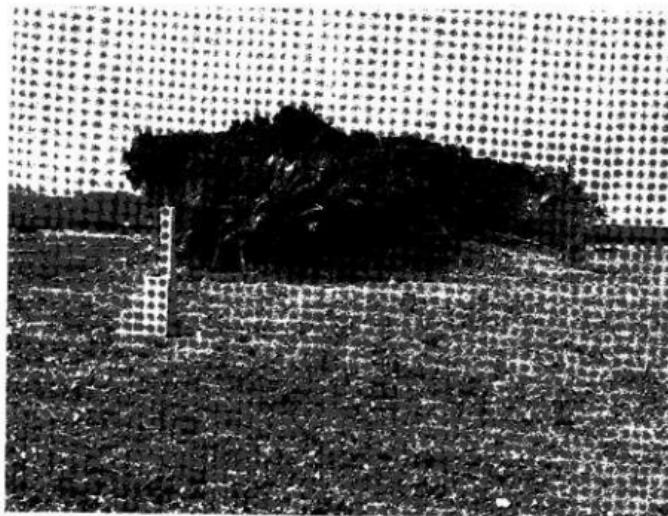
図版 2



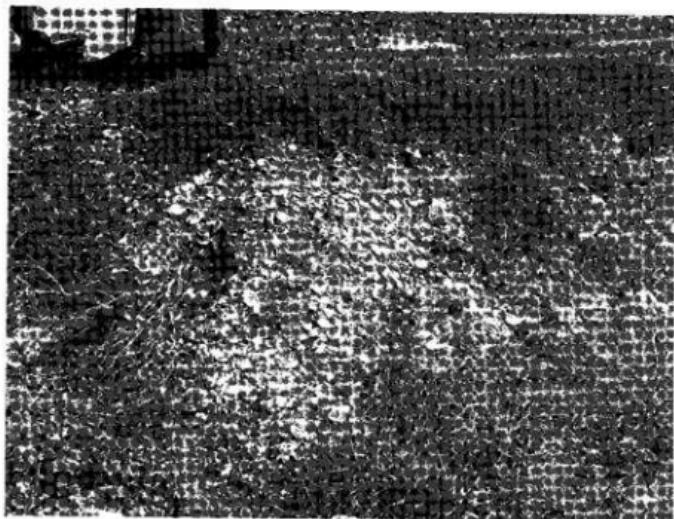
A 遺跡の全景（南より）



B 遺跡の全景（北より）

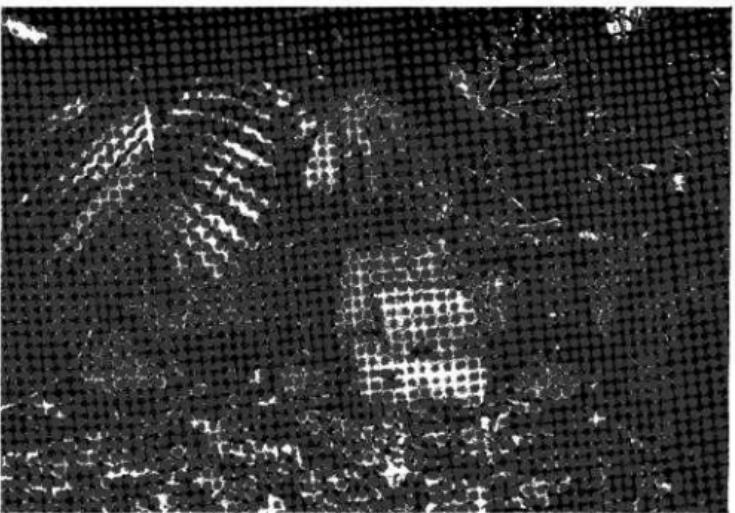


A. パイヌフツ 開墾

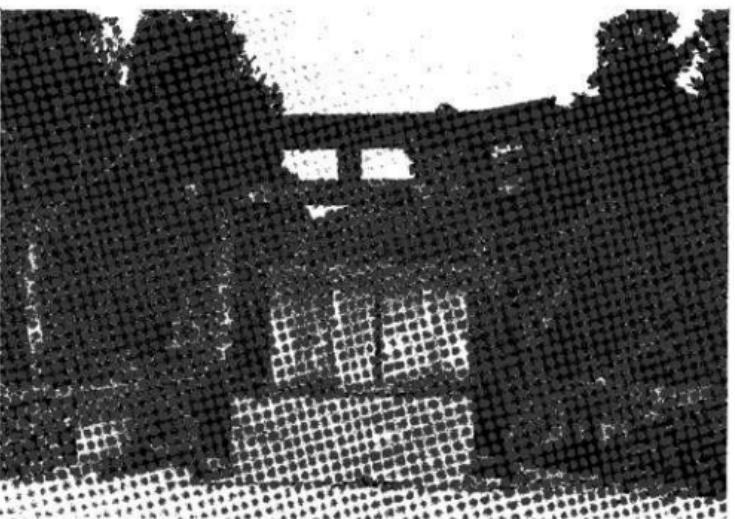


B. 具塚 (一部破壊)

図版 4



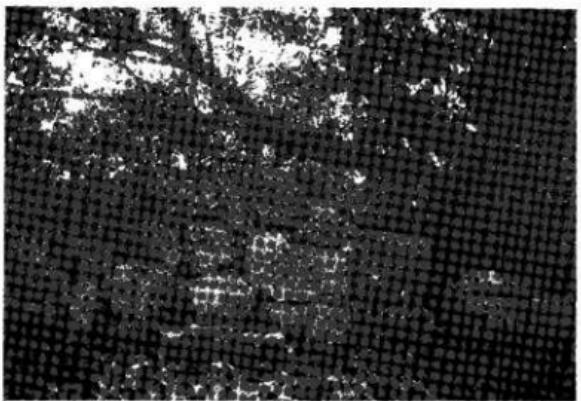
A パイスフツ御獄のイビ



B 字部御獄



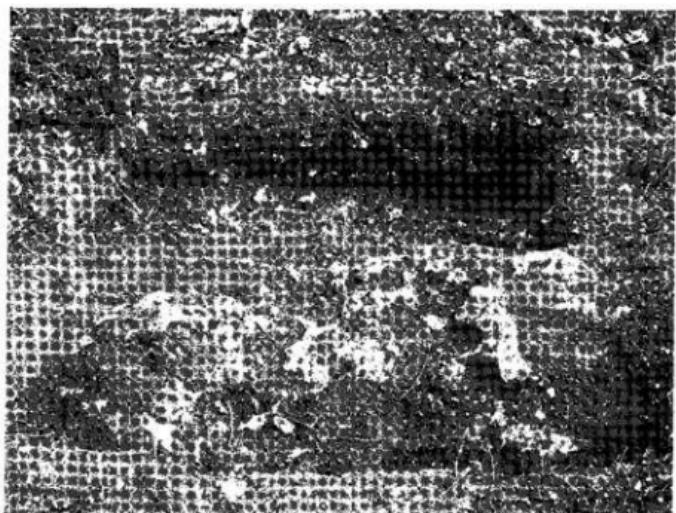
A バイナー井戸（字平得）



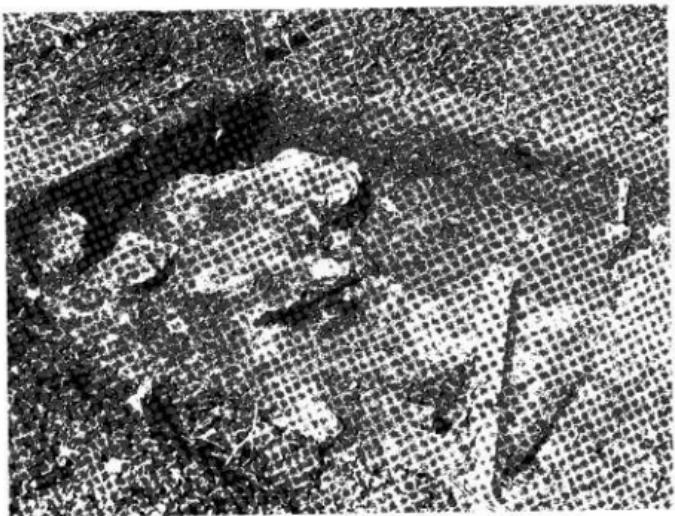
B トメースク（當田トメーの墓といわれる）



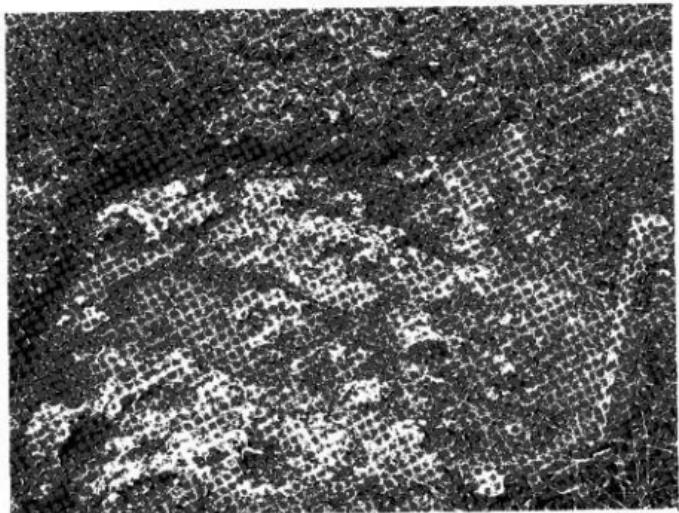
A 発掘グリット



B 発掘グリット

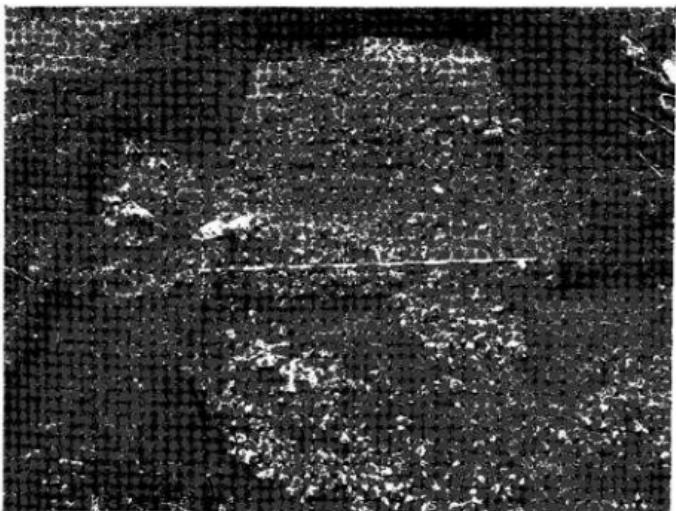


A 石灰岩基盤が露出したグリッド



B 同 上

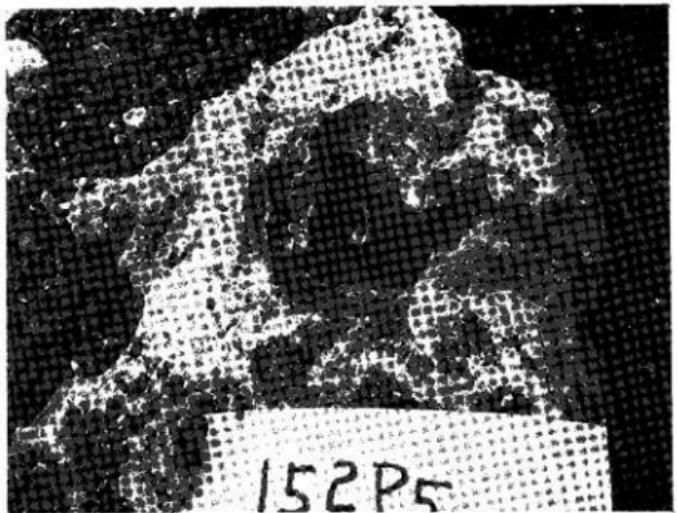
図版 8



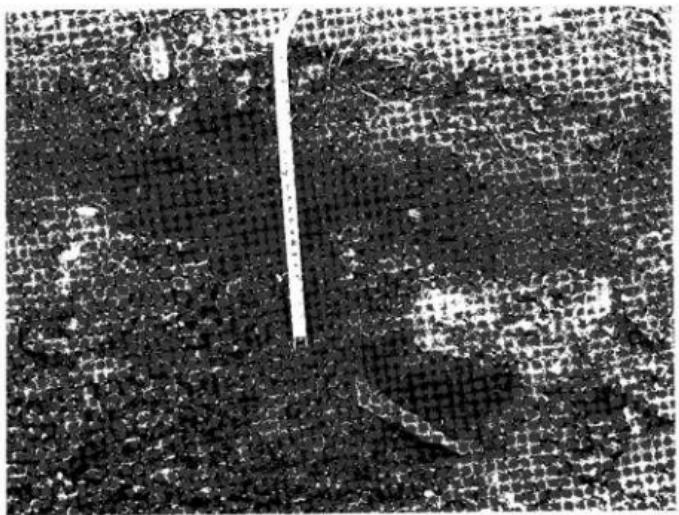
A 石 敷 遺 構



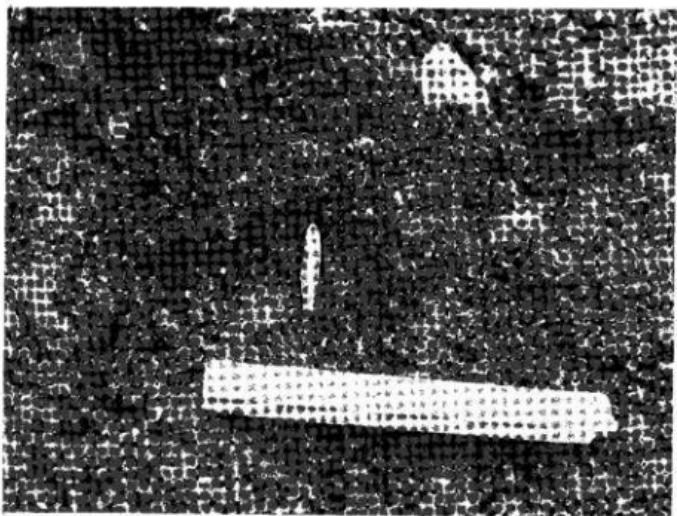
B 地 上 構 築 物



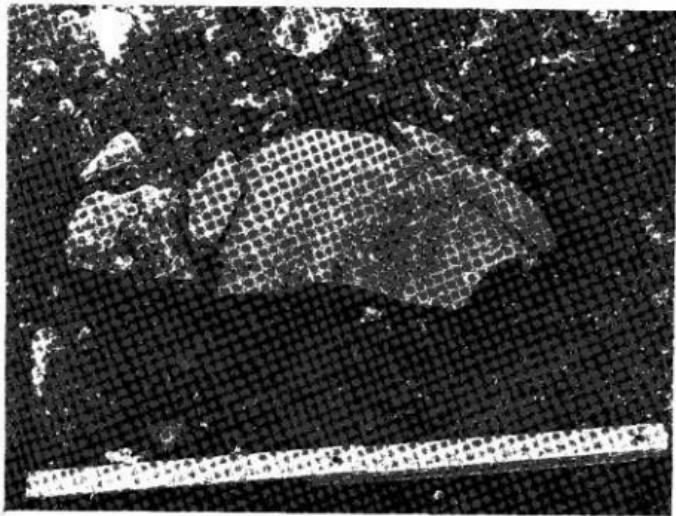
A 丸玉の出土状況



B 刀子の出土状況



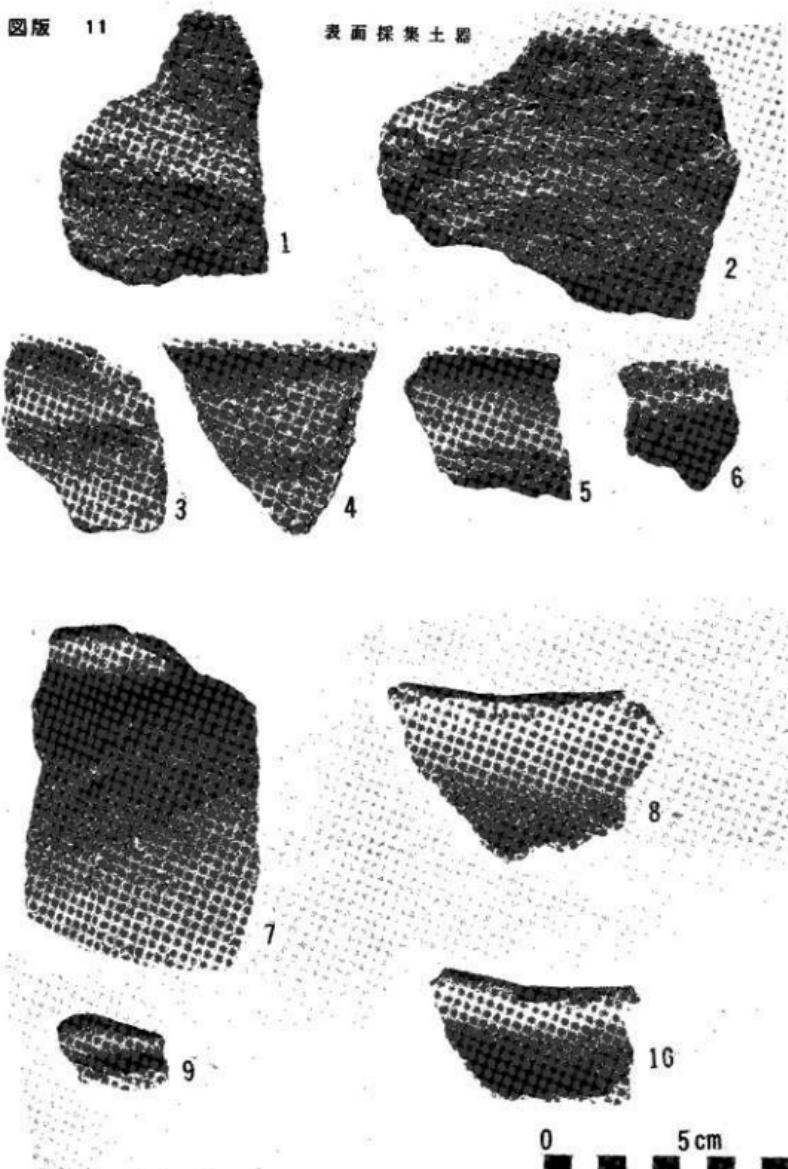
A 骨製品の出土状況

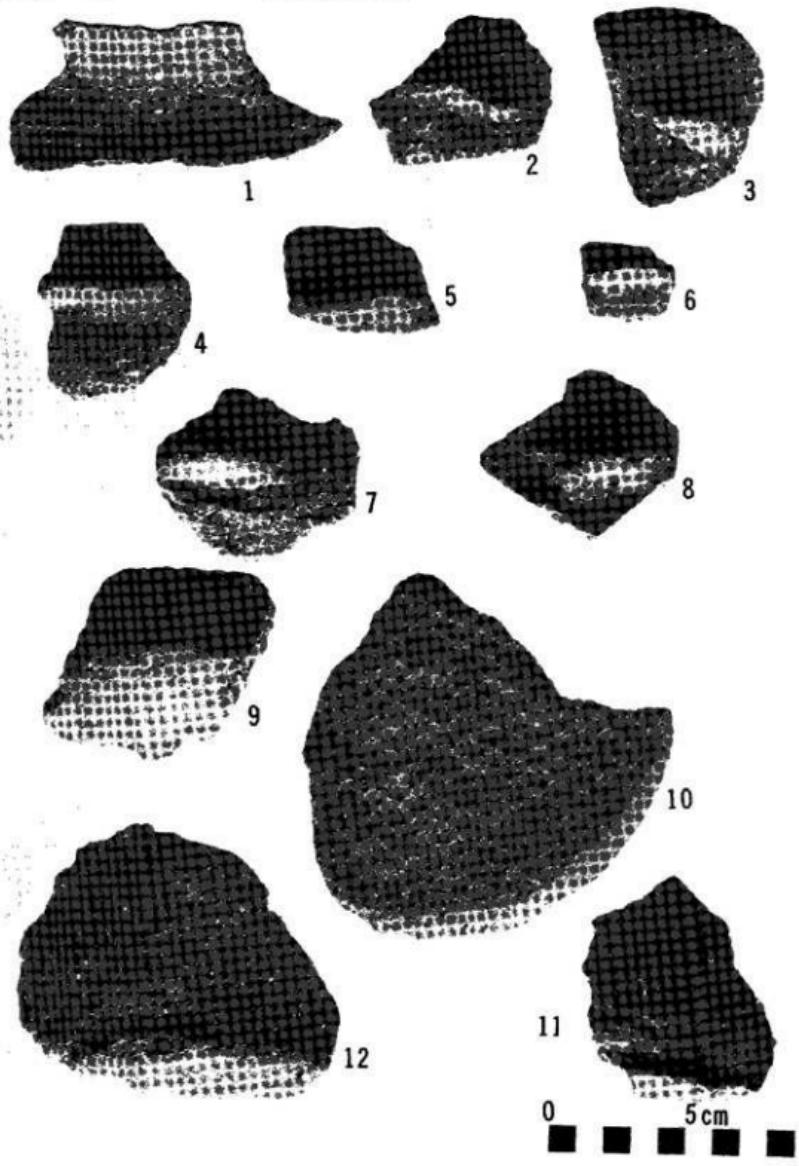


B 南窯陶器の出土状況

図版 11

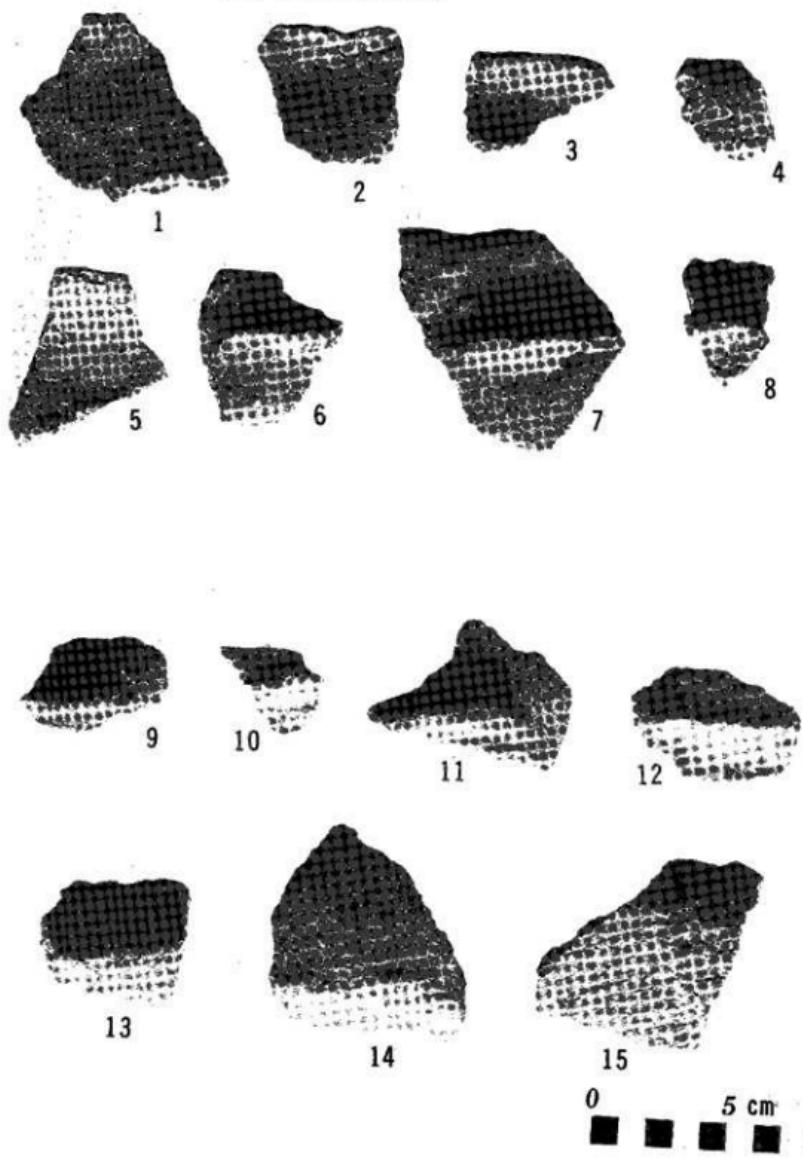
表面採集土器



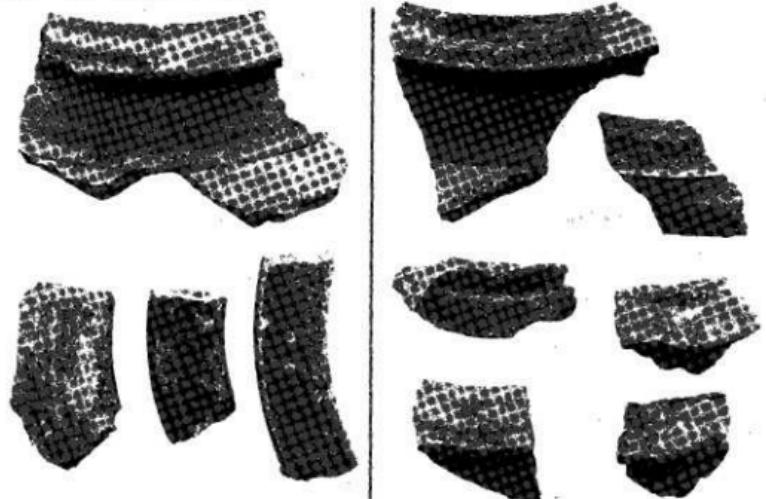


図版 13

発掘で出土した土器

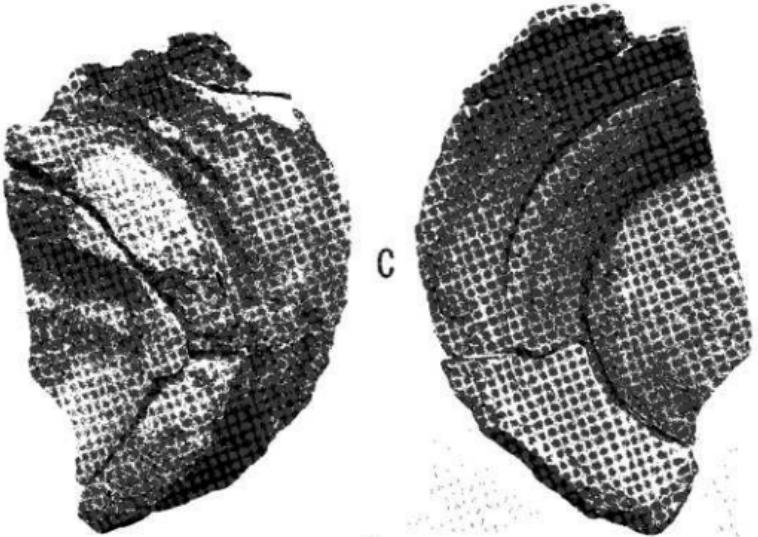


圖版 14 南蛮陶器 I 類 A

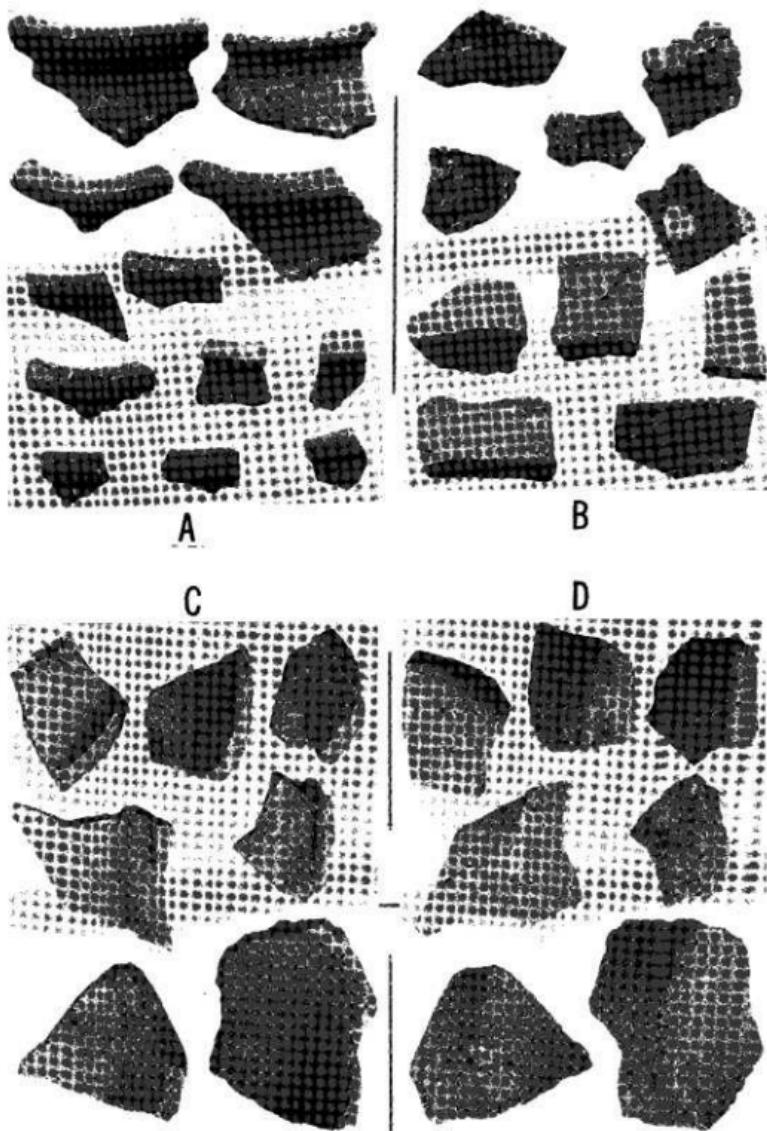


A

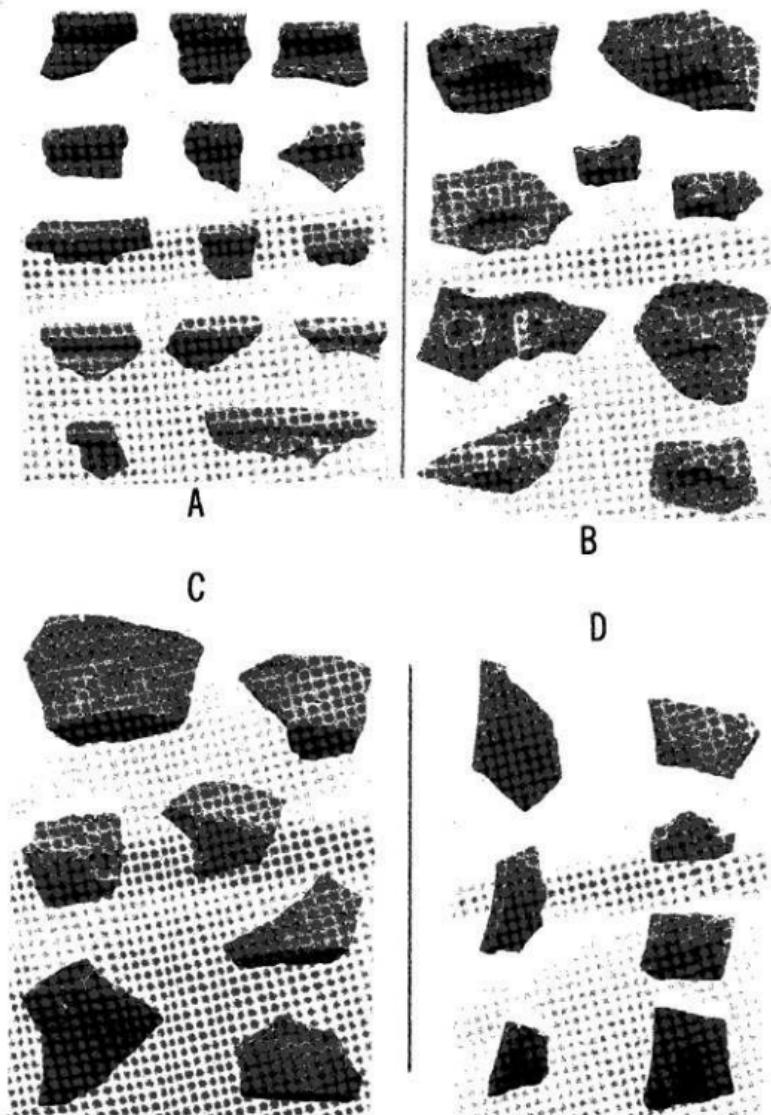
B



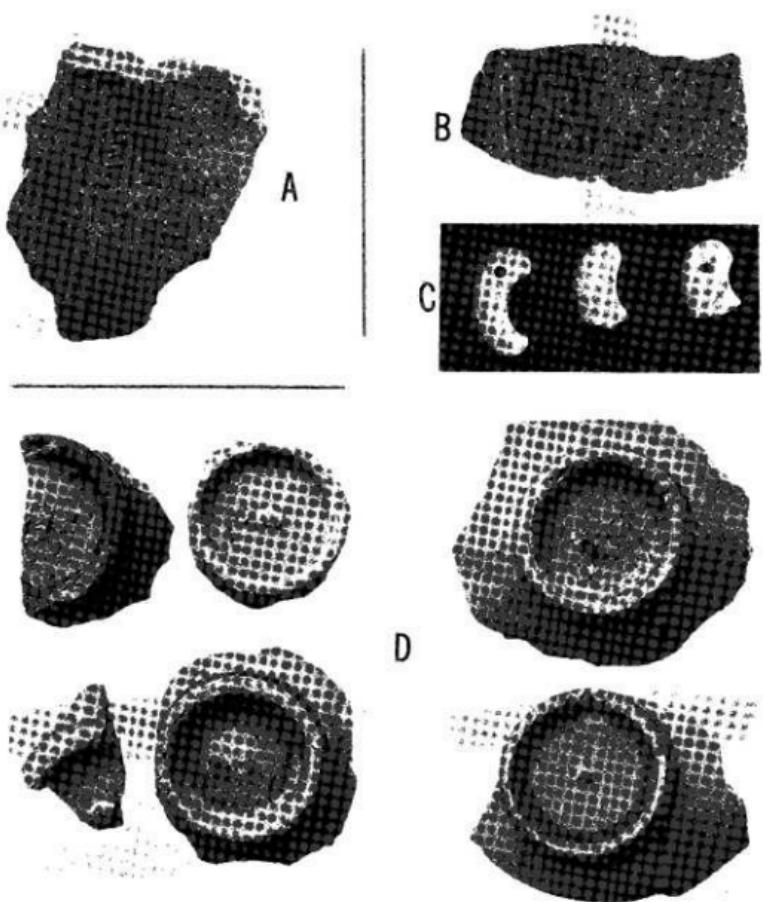
図版 15 南蛮陶器Ⅱ類A



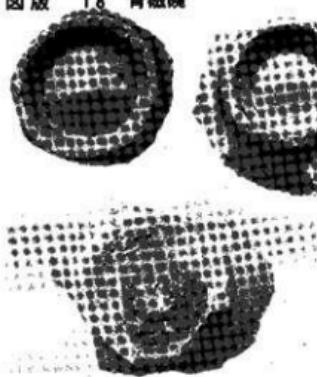
図版 16 南蛮陶器 II類B・III類



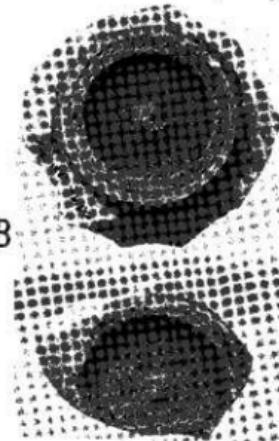
图版 17 刻印南蛮陶器·勾玉·青磁碗



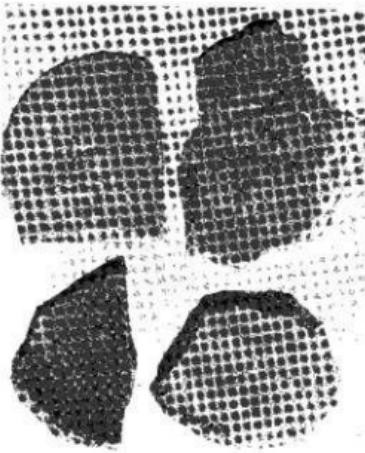
図版 18 青磁碗



A



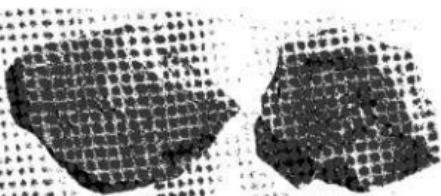
B



C

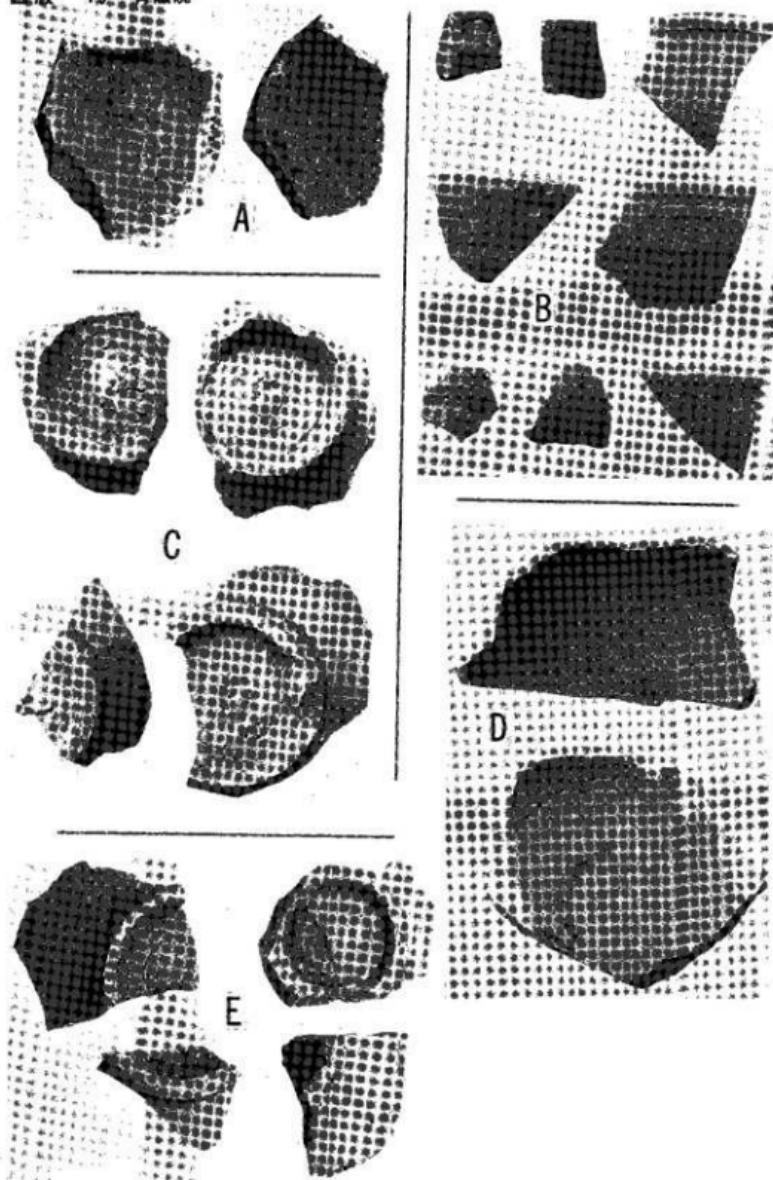


D



E

圖版 19. 青磁碗



図版 20 青磁(盤・香炉・フタ), 白磁



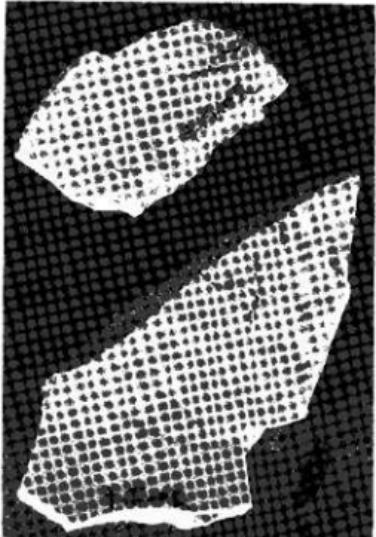
A



B

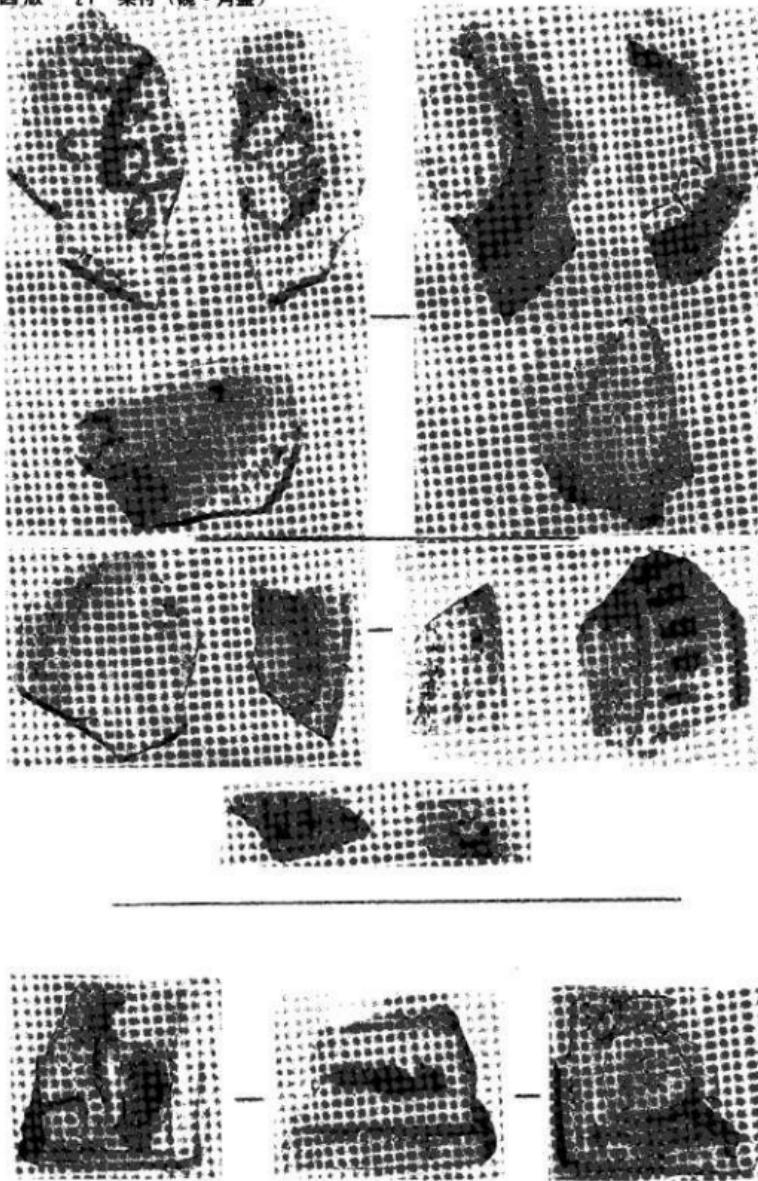


C



D

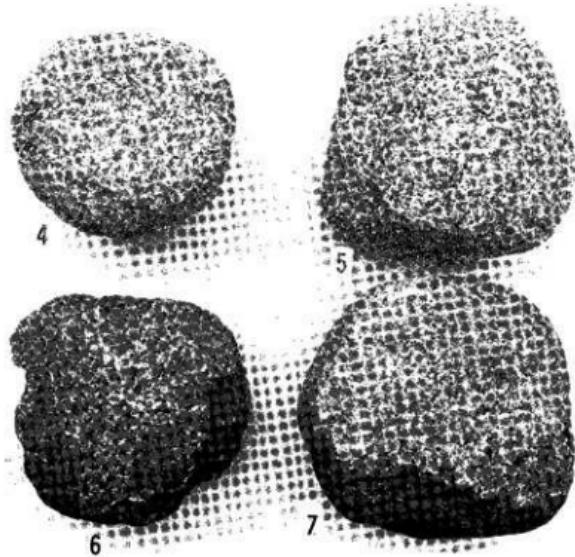
図版 21 染付（碗・角盤）



圖版 22 石 器



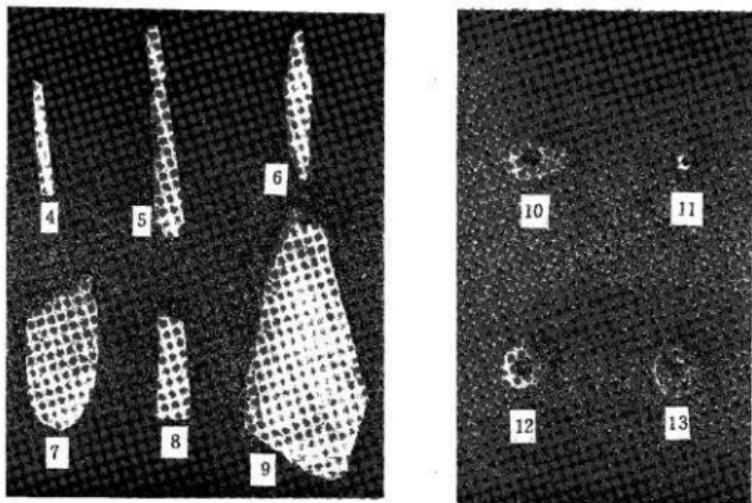
0 10 cm



圖版 23



A 刻印南蠻陶器，石斧，刀子



B 骨製品，玉

沖縄県文化財調査報告書 第3集
八重山島平得仲本御嶽遺跡

発掘調査報告

印刷 昭和51年3月30日

発行 昭和51年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

那覇市旭町1番地沖配電ビル内

TEL 0988(66)-2731~3

印刷 株式会社 文進印刷

那覇市上間567

TEL 0988(33)-2531